

平安京跡発掘調査概報

昭和58年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

狩猟と採集に明け暮れた原始の時代以来、我が京都市域には、居住に適した平野部及び緩斜面が、約250平方キロメートルも所在し、その範囲に祖先の営為を示す遺跡が、平安京跡をはじめ約830箇所も含まれています。1平方キロメートル当たり3箇所強の遺跡が分布することになり、全国平均の2箇所強を上まわっております。したがって、宅地造成等の中規模以上の開発があれば、遺跡に遭遇する可能性が高くなります。

本市では、このような状況の中で、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、保存し難い遺跡については調査を行い、その成果をできる限り、後世に伝えるよう努めております。

この概報は、昭和58年度国庫補助事業として実施した調査の結果をまとめたものであります。おわりに調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導、御協力をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和59年3月

京都市文化観光局

例 言

1. 本書は京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した、文化庁国庫補助に伴う昭和58年度の平安京跡発掘調査概要報告である。
2. 調査地点は下記の通りである。
 - 1 平安京左京三条一坊 中京区西ノ京勸学院町25-4
 - 2 平安京左京四条一坊 中京区壬生御所ノ内町27-15, 16
 - 3 平安京右京七条一坊 下京区朱雀分木町47
 - 4 平安京右京七条二坊 下京区西七条石ヶ坪町40
3. 本書の執筆分担は以下の通りである。
 - I 1, 2, 4 伊藤潔 3 伊藤・吉村正親
 - II 1, 2, 4 家崎孝治 3 家崎・吉村
 - III 1, 2, 4 本弥八郎 3, 4 菅田薫
 - IV 平田泰
4. 写真は遺構の一部を除き牛島茂が担当した。
5. 本書に使用した遺跡、遺構の記号は奈良国立文化財研究所の使用例に従った。
6. 位置の記載は平面直角座標系IVによる。京都市遺跡測量基準点を使用し、記載した数値はX, Yともm単位で、水準はT・Pである。
7. 本書作成にあたっては、I, II, IIIの遺構、遺物の実測、トレースは主として伊藤潔、野村篤美が行なった。
8. 本書で使用した地図は京都市都市計画局発行の2500分の1の壬生、島原、西京極を使用した。

目 次

I 左京三条一坊	III 右京七条一坊
1 調査経過 …………… 1	1 調査経過 …………… 17
2 遺 構 …………… 2	2 遺 構 …………… 18
3 遺 物 …………… 4	3 遺 物 …………… 21
4 ま と め …………… 7	4 ま と め …………… 22
II 左京四条一坊	IV 右京七条二坊
1 調査経過 …………… 9	1 調査経過 …………… 23
2 遺 構 …………… 10	2 遺 構 …………… 24
3 遺 物 …………… 12	3 遺 物 …………… 27
4 ま と め …………… 16	4 ま と め …………… 29

図版目次

図版一 遺跡 左京三条一坊	図版五 遺跡 右京七条二坊
図版二 遺跡 左京四条一坊	図版六 遺物 左京三条一坊
図版三 遺跡 右京七条一坊	図版七 遺物 左京四条一坊
図版四 遺跡 右京七条一坊	図版八 遺物 右京七条一坊

挿図目次

図1 調査位置図 …………… 1	図8 遺構実測図 …………… 11
図2 遺構実測図 …………… 3	図9 S E 12実測図 …………… 12
図3 遺物実測図 …………… 5	図10 遺物実測図 …………… 13
図4 遺物実測図 …………… 6	図11 軒瓦拓影・実測図 …………… 14
図5 軒瓦拓影・実測図 …………… 7	図12 調査位置図 …………… 17
図6 調査位置図 …………… 9	図13 遺構実測図 …………… 18, 19
図7 S D 15・S K 11断面実測図 … 10	図14 S D 17・23断面実測図 …… 19

図15 遺物実測図	21	図18 北壁断面図	25
図16 調査位置図	23	図19 調査区東側遺構実測図	26
図17 調査区平板図	24	図20 遺物実測図	28

表 目 次

表 1 左京三条一坊出土土器表	31
表 2 左京四条一坊出土土器表	31
表 3 右京七条一坊出土土器表	32
表 4 右京七条二坊出土土器表	32
表 5 右京七条二坊出土土器破片数表	33

I 左京三条一坊

1. 調査経過

中京区西ノ京勸学院町25-4にマンションの建設が計画された。当該地は平安京左京三条一坊に相当し、坊城小路と姉小路の交差部に推定される場所である。そのため昭和58年9月9日試掘調査を実施したところ、地表下1.25mで褐色砂礫を切る南北方向の溝状遺構を2条検出し、また遺構の遺存状態も非常に良好なことを確認した。その結果工事に先立つ発掘調査の必要性が考慮された。

京都市埋蔵文化財調査センターは、原因者株式会社日興不動産と協議を行ない、昭和58年9月14日から10月1日までの期間発掘調査を行なうことになった。発掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターの指導・委託を受けて財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。



図1 調査位置図 (1/5000)

発掘調査にあたっては、試掘調査の結果をふまえ、検出した南北方向の溝状遺構を中心に東西8.5m、南北6.5mの調査区を設定した。盛土・近世層を排土した後、遺構検出に着手した。尚、調査の進行に伴ない、北側へ約25mほど拡張した。

2. 遺 構

層序 調査地の基本層序は、遺構面直上まで盛土(60cm)、黄灰色砂泥層の整地層(40cm)である。以下西半では、褐色砂礫層の無遺物層となるが、東半の路面部では小石が固く敷きつめられた整地層が2層認められ、その下層には泥土が厚く堆積している。また北西隅の一角には、灰色粗砂礫層が堆積しており、大型蛤刃石斧と弥生時代後期の甕・壺の破片が少量出土した。

遺構 今回の調査で検出した遺構は、溝・土壇・柱穴・井戸などである。調査期間の関係で、坊城小路西側溝及び、姉小路南側溝の検出に主眼を置いたため、路面及び宅地部分の調査は充分に行なえなかった。

調査の主目的であった道路の側溝は、平安時代前期から鎌倉時代の南北方向の三条の溝(SD1・6・7)が検出され、これらの溝が坊城小路西側溝と推定されるが、姉小路南側溝は検出することができなかった。

尚、井戸は3基(SE2・4・8)検出したがいずれも近世のものである。

SD1 幅1.0~1.2m、深さ30cmを測る南北方向の溝である。北半では北東方向に斜めに延び、西側立ち上り部には幅13cm、厚さ5cm、長さ2.3mの護岸用の板が施設されており、溝内には、7~10cmの正方形の杭が規則的に2列に打ち込まれている。埋土は2層に分層されるが、出土遺物による時期差はない。出土遺物は、土師器碗・皿類を中心に、須恵器・黒色土器・瓦・銭貨・土馬などがある。平安時代前期に位置付けられる。

SD6 幅1m、深さ20cmを測る南北方向の溝であるが、SD1と重複したところで止まっている。埋土は褐灰色泥砂・暗褐灰色砂泥の2層に分層でき、上層からは平安時代前期から後期の土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・輸入陶磁器・瓦が、下層からは平安時代前期の土師器・須恵器・瓦が、いずれも少量出土した。尚、下層からは、巡方(20)、重圈文平丸瓦(21)が出土した。

SD7 SD6の東1.5mに位置する幅1.3m、深さ15cmを測る南北方向の溝である。SE2に切られているが、SD6とほぼ同位置で止まると考えられる。埋土は1層であり、平安時代後期から鎌倉時代の土師器・陶器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。

路面 SD7の東側では、拳大の石を敷きつめた整地層が2層検出された。両層とも固

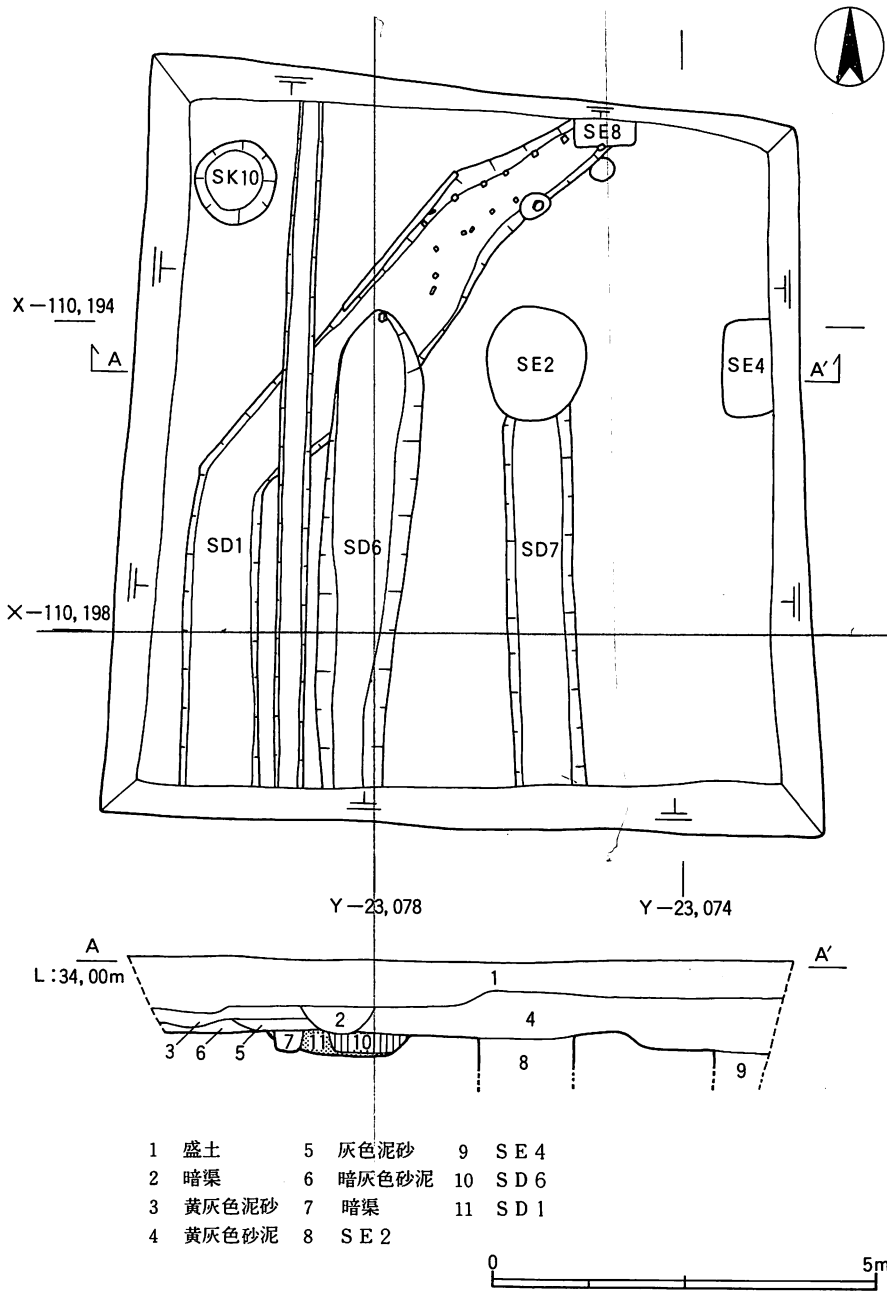


图2 遺構実測図

く叩きしめられており路面と考えられる。上面からは、平安時代後期から鎌倉時代の土師器・陶器・瓦器・輸入陶磁器・瓦などが出土した。また、路面1・2層からは小片になった土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦などが出土した。

3. 遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱にして10箱ほどであり、大半を土師器・瓦が占める。遺物の種類としては、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・瓦・土製品・銅製品等がある。

これらの遺物は、現在整理中のものもあるので、ここでは比較的整理の進んでいるSD 1出土の遺物を中心に、現段階までに知り得たことを報告する。

土師器 土製器には、椀・皿・杯・高杯・甕・脚台等の器形がある。

椀(1~5) 平底で、直線的に外上方へのびる体部をもつ。口縁端部は丸くおさめるものと、小さく肥厚するものがある。外面の調整はへら削りによるものが多い。他に少量ではあるが、口縁部のみヨコ方向のナデ調整を施し、体・底部には押圧痕が残り未調整のもの(1)もある。

皿(6-10) 広い平らな底部とわずかに内弯気味に斜め上方にひらく口縁部をもつものが多いが、口縁部が外反するもの(6)もある。大きさにより皿A I、皿A IIに分類できる。皿A Iは、口縁端部が内側に肥厚している。外面はへら削り調整を施す。皿A IIは、口縁端部は小さく肥厚し、口縁部下半はナデが残る。

杯(11~14) 高台を有する杯Bと、高台を有しない杯Aとがある。杯A(11~13)は、広く平らな底部と斜め上方にひらく口縁部とからなる。口縁部は丸くおさめるもの(11)と、わずかに外反し、内側に小さく肥厚するもの(12・13)とがある。体部と底部の境界は不明瞭である。外面の調整は、口縁部までへら削りがなされているものと、口縁部のナデ調整が強く残るものがある。杯B(14)は、平底と斜め上方に開く体部とからなり、高台をもつ。口縁部は強いナデ調整により外反し、端部は丸くおさめる。外面は、粗いヨコ方向のへら削りののち、粗いへらミガキを施す。

脚台 15は1/6ほどの破片である。脚部に横1.7cm縦3cm以上の長方形の透しを六方に穿つ。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。

甕 口縁部は外反し、端部を内側に折り曲げる。体部は粗いハケ調整を施す。

高杯 多角形に面取りした脚部に、水平にひらく杯部をもつ。

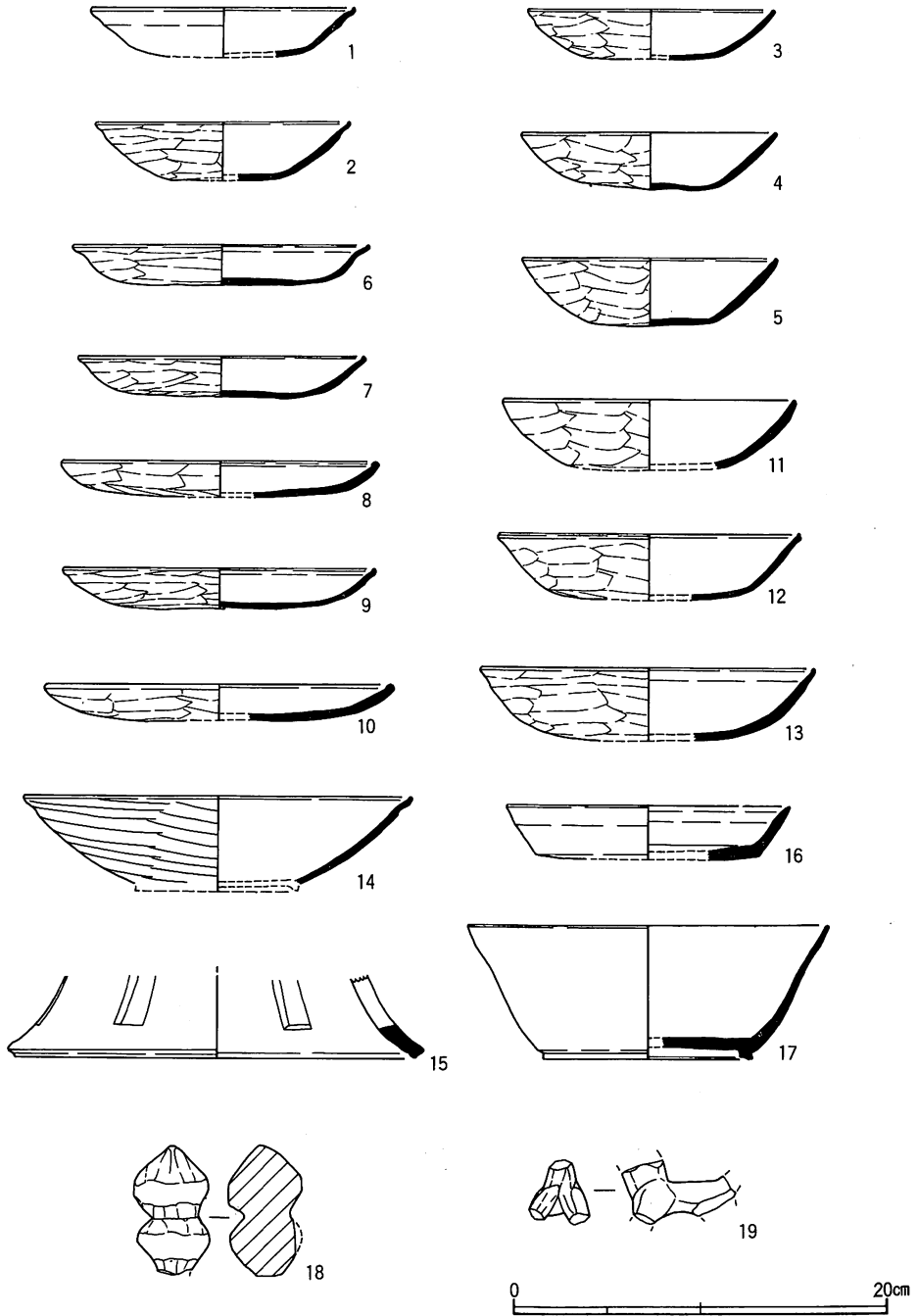


图3 遺物実測図

須恵器 須恵器には、蓋・皿・杯・鉢・甕等の器形があるが、出土総量は少ない。

皿 (16) 平坦な底部に低く斜め上方に開く口縁部をもつ。底部外面は未調整であり、内面及び口縁部外面はヨコナデ調整を施す。軟質であり、口縁部内外面が煤けている。

杯 (17) 底部と体部の境界付近にわずかに外方に張った高台を付し、体部から口縁部はやや弯曲しながら、外上方へのびる。底部外面はヘラ削りのままであるが、内面及び口縁部外面はヨコナデ調整を施す。口径19.5cmを測る大型品である。

土製品 (18・19) 土馬及び土製五輪塔がある。土馬 (19) は体部のみの破片である。黄褐色の土師質の焼きで手捏の粗製品である。小型で粗雑な作りであり、終末期の様相を呈している。SD1より出土した。土製五輪塔 (18) は、空・風輪部分であり、淡茶灰色の土師質の焼きで手捏の粗製品である。空輪上部は丁寧にヘラ成形されているが、他は粗雑なヘラ削りである。火輪以下は欠損している。SD7より出土した。

銅製品 銚帯の飾り板金具のひとつである巡方の表金具がSD6より出土した。

巡方 (20) 縦黄3.3cmの正方形を呈する。下方寄りに長方形の透し孔があり、裏面の四隅に鋌足を取り付け裏面を窪ませ腰高につくる。一見銀製に見えるが分析の結果、砒素を多く含んだ青銅製である。黒漆膜が残っている。

銭貨 (25) SD1より完形の隆平永宝が1枚出土した。文字は細字で、平の第1画と4画の間隔が狭く、末画が長い。「長平」とよばれる。外縁は幅広である。

軒瓦 SD1・6内より5点出土した。

重圏文軒丸瓦 (21) 中心点を持たない同心円文で、磨滅が進んでいるため文様はすり切れ気味になっている。奈良時代後期の特徴である筒部との接合がやや下方になり、瓦当部は4cmと厚くなっている。SD6出土。

重郭文軒平瓦 (22) 瓦当部右端に範傷が認められ、下記の瓦当と同範であると思われる。しかし製作技法上は異なり下端部は厚く作らない。全体は灰色を呈しやや外孔性で白色の小石を多く含んでいる。SD1出土。

重郭文軒平瓦 (23)

凸部を縄目の叩きとした後にすり消している。瓦当部の右端に範傷が1ヶ所あって同範文様を決定する上で注

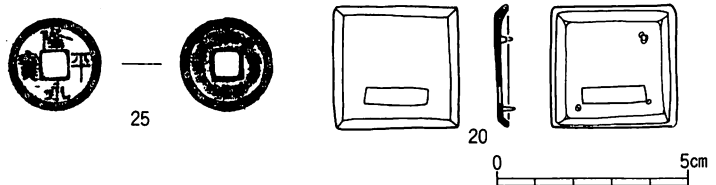


図4 遺物実測図

意すべき例である。胎土には白色の小石を多く含み、火災に遇ったのか褐色化が0.5cmの深さまで進行している。SD1出土。

均正唐草文軒平瓦(24) かなり退化した唐草文でその線もやや直接的に折れ曲ったものである。凹部の布目は荒くかつ乱れている。SD1出土。

4. ま と め

調査地は推定平安京跡三条一坊に該当する地であり、坊城小路と姉小路の交差点が予測された。

今回の調査では、条坊関連遺構の検出にとどまり、検出した南北方向の3条の溝は、いずれも坊城小路西側溝に関連する遺構と考えられる。姉小路南側溝は検出されなかった。SD1は、調査区北半で北東方向に延び、その部分に護岸用施設を有する。側板・杭列などの状況から判断して道路を横切る暗渠の可能性が考えられる。また姉小路との交差点部

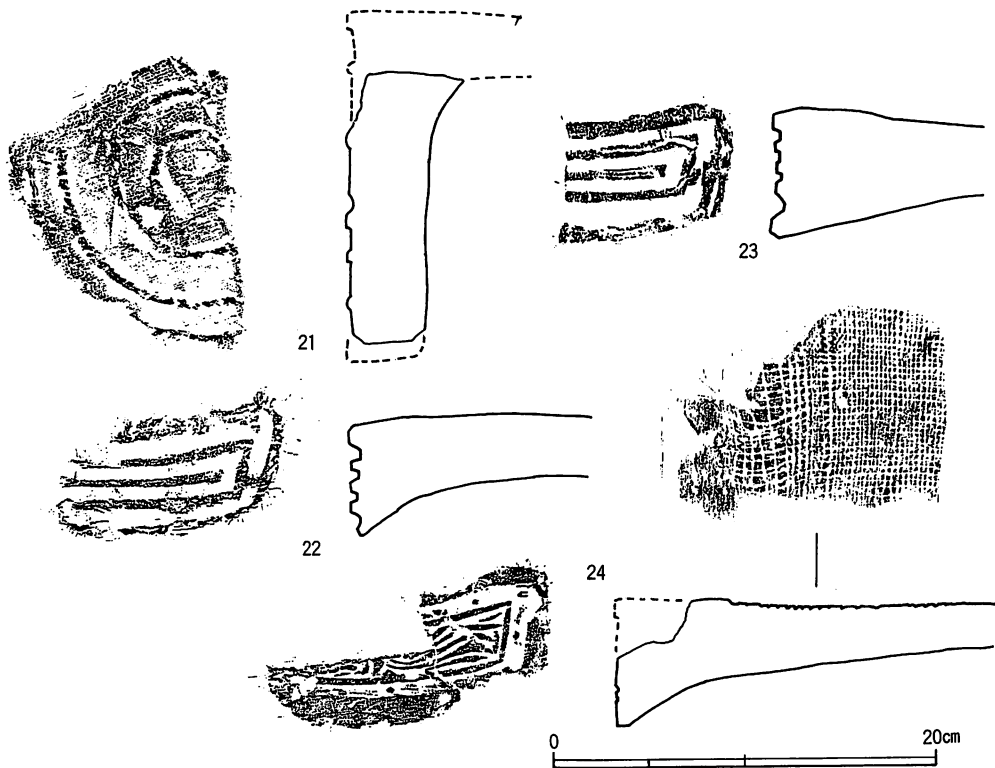


図5 軒瓦拓影・実測図

に推定されることも考え合せ、条坊遺構の在り方に新たな資料を提供するものであり、注目される。

S D 1より出土した土器類(1～17)は、いずれも平安時代前期に位置付けられる。土師器は全体的に小型化しており、器高も低くなる。また器形間の差異も不明瞭となり、特に杯にその傾向が強い。外面はヘラ削り調整であるが、全体に粗雑である。器形や手法に新しい要素をもつものもある。中務省S K 201出土遺物^{註1}に比して新しい様相を呈しており、9世紀中頃の年代が与えられよう。

今回の調査で磨滅していない弥生土器や大型蛤刃石斧が出土したことは、付近に弥生時代遺跡の存在を予測させる。今後の当地周辺の調査に期待がもたれる。

註

1. 『平安京跡発掘調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化研究所 1983

II 左京四條一坊

1. 調査経過

中京区壬生御所ノ内町27-15, 16にマンションの建設が計画された。当該地は平安京四條一坊にあたり、四條大路に関連する遺構の検出が予想された。昭和58年8月10日に試掘調査を行なったところ、地表下1.25mにて平安時代の遺物を包含する東西方向の溝を検出し、遺跡の遺存状態が良好なことが判明した。その結果、工事に先立つ発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市埋蔵文化財調査センターと土地所有者富創建設株式会社との間で協議が行なわれ、昭和58年8月19日から8月31日までの期間発掘調査を行なうこととなった。発掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターの委託を受けて財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

発掘調査にあたっては、試掘調査の結果をふまえ、検出した東西溝を中心に東西5.8m、

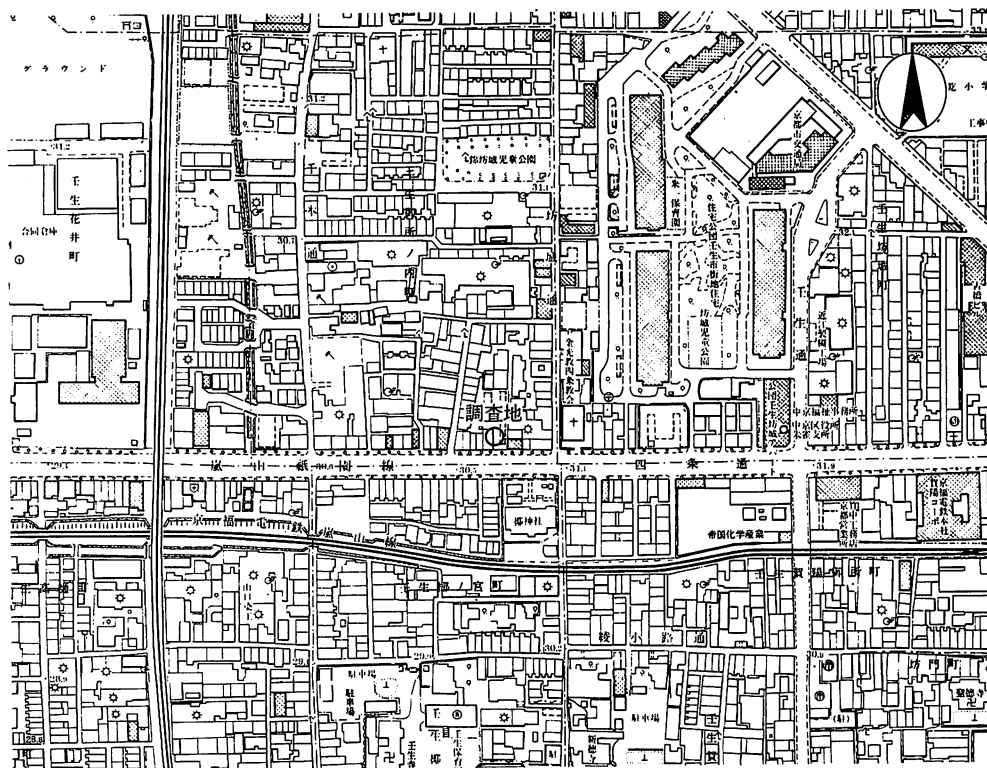


図6 調査位置図 (1/5000)

南北7.6mのトレンチを設定した。地表下1.2mまでの盛土を機械力によって排土したのち、遺構検出に着手した。なお、調査の進行に伴ない北側と南側にそれぞれ約9㎡の拡張を行なった。

2. 遺 構

調査地の基本層序は、盛土が約0.8m、旧耕土層が0.2m、近世層が0.2m程の厚さであり、その下層はオリーブ黒色の固く締まった混礫泥砂層となる。平安時代の遺構はこの層を掘り込んで成立する。その整地層の下層は黄褐色砂礫層となり、無遺物層である。

今回の調査で検出した遺構は、井戸、土壇、溝、小穴などがある。本報告では、平安時代の遺構を中心にその概要を記す。

SD15 試掘調査で確認した溝で、東西溝である。幅1.8m、深さ0.55mの掘形をもち、堆積土は上から灰色砂泥層（第1層）、オリーブ黒色混礫泥砂層（第2層）、灰色混礫砂泥層（第3層）、灰色泥土層（第4層）に分かれる。第3層より完形品ばかりの土師器皿が20数個体出土した。それらの土師器皿は南肩より溝内に落ち込んだ状態を示す。

SD25 南側へトレンチを拡張して検出した東西溝で、幅4.2m、深さ0.6m程の掘形をもち。溝内には暗褐色の腐植土層が全体に厚く堆積し、その上に灰色泥砂層、灰褐色泥砂層などが堆積している。腐植土層からは、箸、下駄などの木製品が出土しているが、土器の量は少なく、細片のことが多い。平安時代後期である。

SK11 調査区北側で検出したもので、SK9に切られ、SD15、SE18を切り込んで成立している。短径1.55m、長径2.8m以上の長方形を呈する。深さは0.3mを測る。堆積土はオリーブ褐色粗砂層、灰色粘土層の上下2層に分層できる。掘形内より多量の土製の鋳型片が出土しており、何らかの工房跡と考えられる。時期は平安時代後期である。

SK13 SD15の上面で検出したもので、多量の炭と土師器皿が出土している。長径1.3m、短径1.1mの楕円形の掘形をもち、深さは0.3mを測る。平安時代後期である。

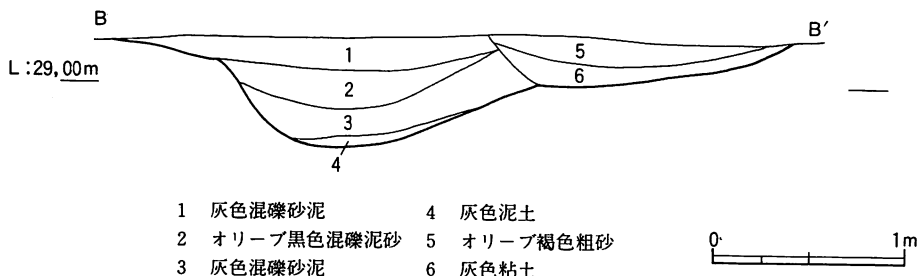


図7 SD15・SK11 断面実測図

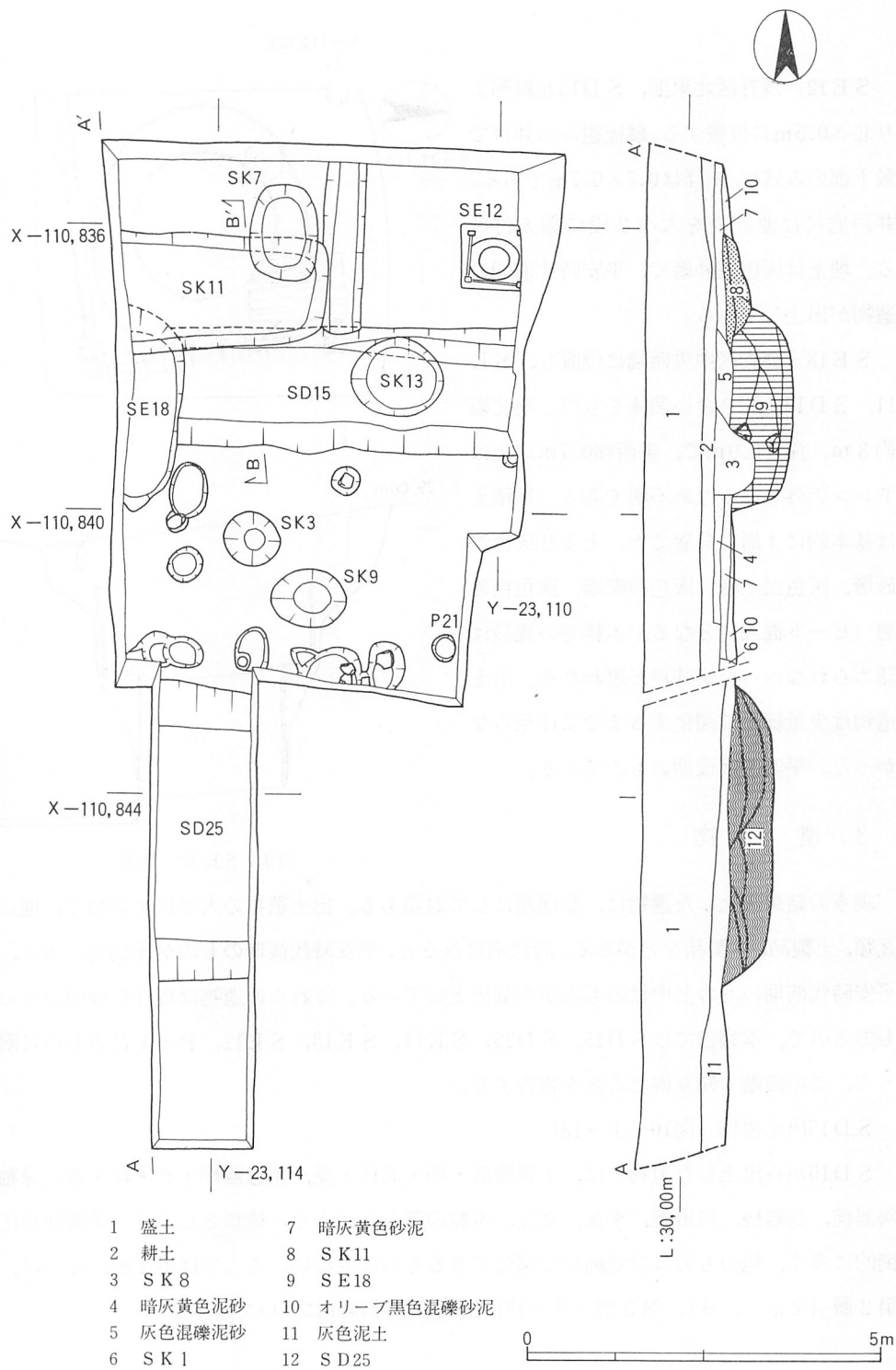


図8 遺構実測図

SE12 調査区北東部，SD15北肩部より北へ0.5mに位置する。縦板組みの井戸で最下部のみ残存。内径は0.7×0.7mである。井戸底には曲げ物を大小2段に据え付ける。埋土は灰色泥砂層で，平安時代前期の遺物が出土している。

SE18 調査区中央西端に位置し，SK11，SD15と切り合い関係をもつ。南北幅約3m，深さ0.9mで，東西幅0.7m以上はトレンチ外となるため不明である。堆積土は基本的に4層に分層でき，上より灰色泥砂層，灰色泥土層，灰色砂礫層，灰色粗砂層（ピート混入）となる。木枠等の施設は認められなかったが井戸と思われる。出土遺物は少量細片で図化するまでには至らなかった。平安時代後期のものである。

3. 遺物

調査の結果出土した遺物は，整理箱にして24箱ある。出土遺物の大半は土器類で，他に瓦類，土製品，木製品などがある。時代別にみると，平安時代後期のものが圧倒的に多く，平安時代前期のものと中世のものが少量出土している。これらの遺物は現在整理中のものもあるので，本報告ではSD15，SD25，SK11，SK13，SE12，Pit21のものに限って，この段階で知り得たことを報告する。

SD15出土遺物（図10-1～18）

SD15から出土した遺物には，土師器皿・杯・高杯・甕，須恵器杯・甕・鉢・壺，緑釉陶器椀，瓦器椀，白磁碗，平瓦，丸瓦，木製の箸などがある。種類としては土師器皿が圧倒的に多く，他のものは少量細片で図化できるものは少ない。ここでは第1層（1，3），第2層（2，4，5），第3層（6～18）出土の土師器皿について述べる。

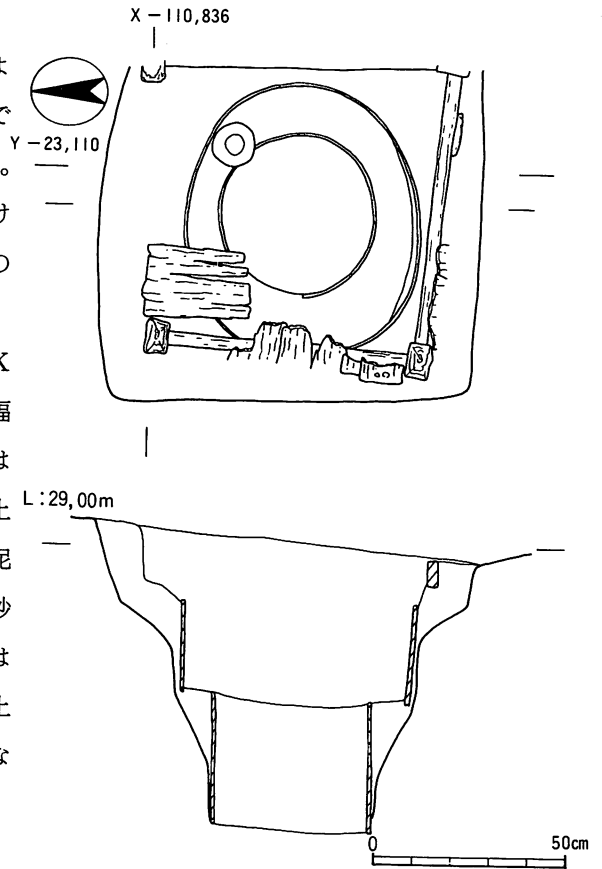


図9 SE12 実測図

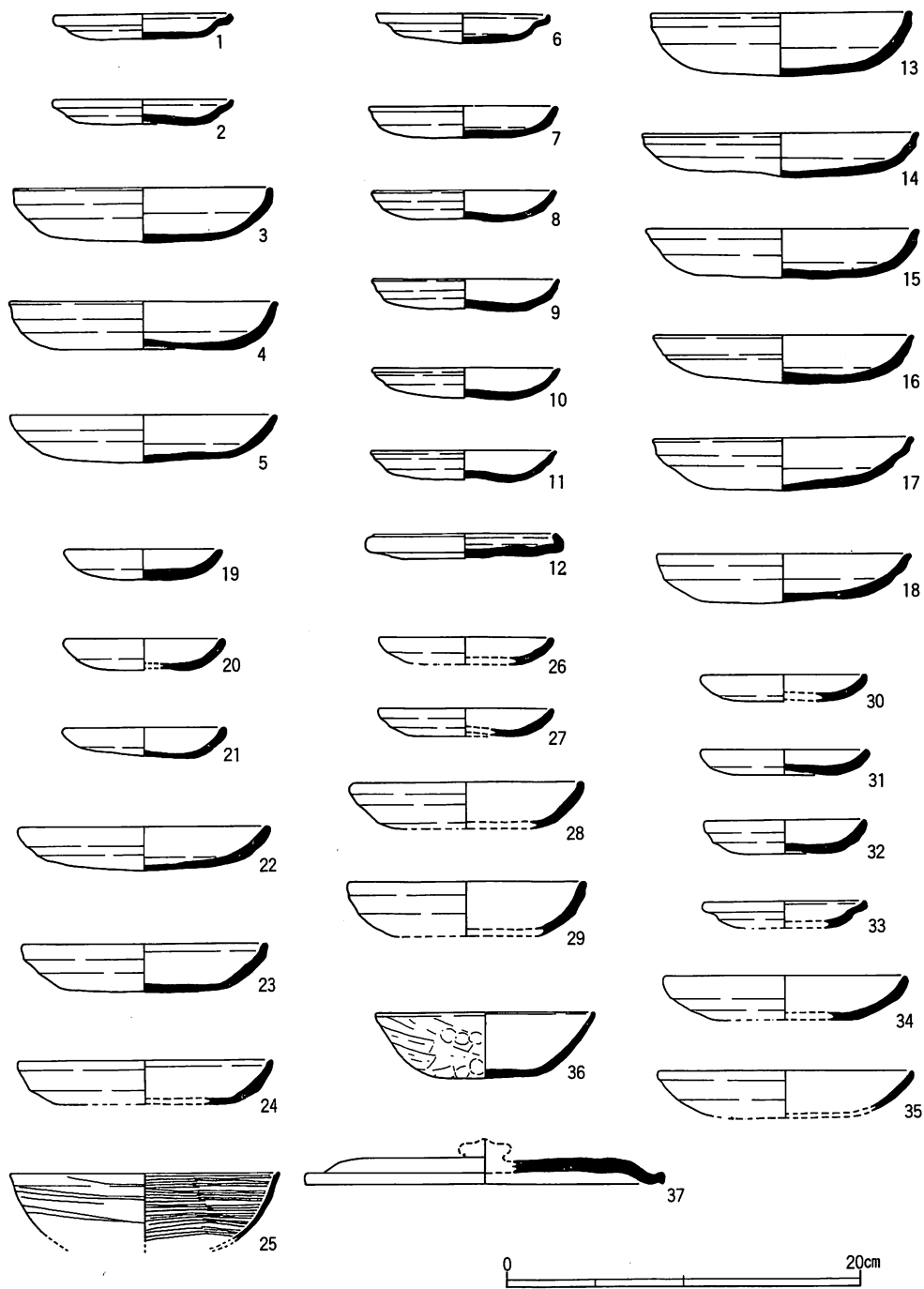


图 10 遗物实测图

土師器皿は、口径10cm前後、器高1.4～1.8cmのI類と、口径15cm前後、器高2.5～3.1cmのII類とに大別できる。

I類には、屈曲した口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめるもの(1, 2, 6), 口縁部を内側に折り曲げるもの(12), 内弯する口縁部を丸くおさめるもの(7～9)と同じく口縁部が外反するもの(10, 11)がある。いずれも底部内面を一定方向に、口縁部内外面を時計回りにナデる。底部外面はオサエ調整を行なう。胎土は砂粒を含み、黄橙色を呈する。

II類には、体部が内弯し、口縁部が上方に立ち上がり端部が丸くおさまるもの(3, 13), 体部が直線的に内弯し、口縁端部が丸くおさまるもの(5), 体部が内弯し口縁端部が外反するもの(4, 14～18)がある。底部内面は一定方向に、口縁部内外面を2段に横ナデを行なう。胎土は砂粒を含み、黄橙色を呈する。

S D25出土遺物(図10—30～35, 図11—39)

出土遺物には、土師器皿、須恵器甕、輸入陶磁器、軒丸瓦、丸・平瓦、及び箸、下駄などの木製品などがある。ここでは土師器皿、軒丸瓦について述べる。

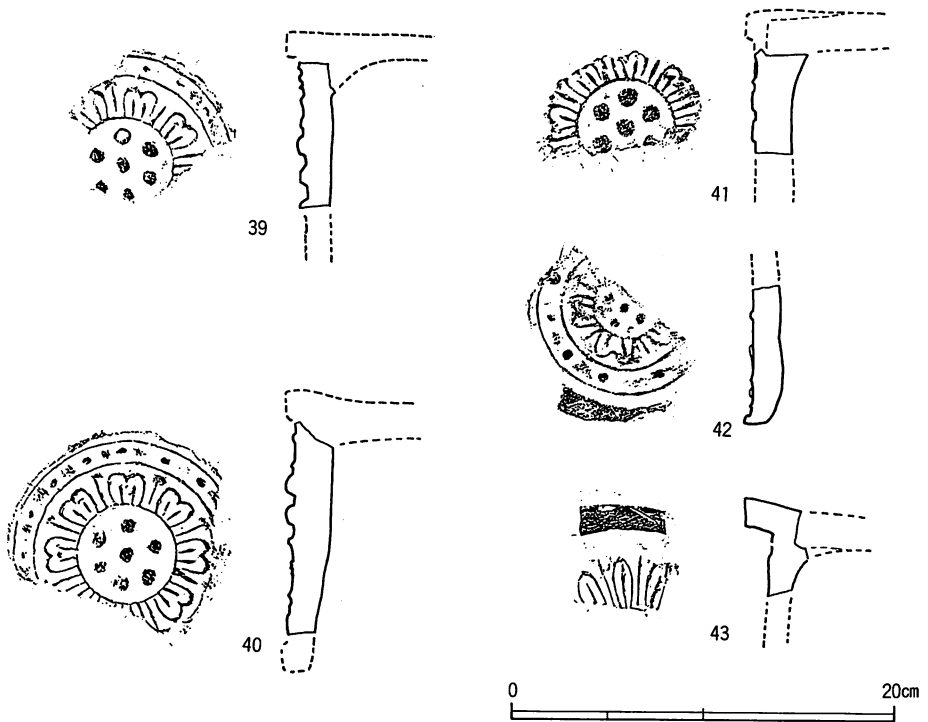


図11 軒瓦拓影・実測図

土師器皿は大小2種に分類できる。小のものには、屈曲した口縁部をもつもの(33)と内弯する口縁部をもつもの(30~32)がある。大のもの(34, 35)は体部が直線的に内弯し、口縁部を上方に丸くおさめる。いずれも胎土は砂粒を含み、黄橙色を呈する。

複弁蓮華文軒丸瓦(図11-39)はS D25北半上層から出土したものである。全体の¼のみ残存し、外周縁も欠落する。中房は1+6のやや大きな主文で、複弁部は線状になった肉のうすいものになっている。胎土は砂の多い須恵質を呈し、入れ込み式の接合である。

S K11出土遺物(図10-26~29, 図11-43)

出土遺物には、土師器皿、須恵器甕、瓦器椀、輸入陶器、軒丸瓦、丸・平瓦などがあるが量は少ない。その他には性格不明の鋳型片が多量に出土している。

土師器皿(26~29)は大小2種に分類できる。いずれも内弯する口縁部をもち、口縁端部を方くおさめる。胎土は砂粒を含み、黄橙色を呈する。調整手法ともS D15・25と同じ。

輸入陶器壺(図版7-38)は須恵質の素地に白化粧土を施し、黒絵具かき取り技法により、牡丹文様を鮮明に浮き出す。残存長径約6cm、短径4cm、厚さ0.5cmである。内面のロクロ目から判断して、壺肩部に相当するものと思われる。磁州窯の特徴を良く備える。

素弁蓮華文軒丸瓦(図11-43)は非常に堅い須恵質で淡褐色を呈している。細長い花卉を一弁ごとに弁間文を配しているが、外区を持たないものである。外周縁は1.5cmの高さを持つもので、やや入れ込み式になっている。

S K13出土遺物(図10-19~25, 図11-40, 41)

検出した遺構の中で一番土師器の出土量が多い。土師器皿の他には、瓦器椀、輸入陶磁器、軒丸瓦、丸・平瓦などがある。

土師器皿は大小2種類があり、小のものには口縁部を丸くおさめるもの(20, 21)と、外反するもの(19)がある。大のものには直線的に内弯する体部に口縁端部が丸くおさまるもの(22)と口縁部が立ち上がるもの(23, 24)がある。調整手法ともS D25のものと同様である。胎土は砂粒を含み、黄橙色を呈する。

瓦器椀(25)は、ゆるやかに内弯する体部と口縁部をもち、口縁端部内側に一条の沈線が入る。口縁部内面は丁寧なヘラミガキを行ない、外面は粗雑なヘラミガキである。口縁部外面をヨコナデし、体部外面はオサエ調整。胎土は精良である。

複弁蓮華文軒丸瓦(40, 41)は、S D25出土の(38)と全く同一の文様を持つもので全体が淡褐色を呈し、範の板目がよく残っている。胎土は須恵質を呈し、(38)と同様入れ込み式の接合である。

S E 12出土遺物 (図10-36, 37)

出土遺物には、土師器皿・杯・甕・須恵器皿・甕などがある。

土師器杯 (36) は直線的に内弯する体部をもち、口縁端部は内側に肥厚する。底部、体部外面はヘラケズリ調整、底部内面には針状のものによる×印がある。胎土は砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。完形品である。

須恵器蓋 (37) は平らな天井部をもち、天井部と口縁部との境界は段をなす。口縁端部は下方へ短く屈曲する。1/3残存し、つまみ部分を欠くが宝珠つまみがつこう。胎土は白色砂粒を含み、青灰色を呈する。

P i t 21出土遺物 (図11-42)

土師器皿、軒丸瓦が出土している。

複弁蓮華文軒丸瓦 (42) は、主文はおそらく1+4で、やや乱れた複弁がうすれて線状になる。又弁間文も配されている。全体は軟質で褐白色である。瓦当下端面をヘラケズリしているためやや楕円になっている。

4. ま と め

今回検出した主要な遺構・遺物としては、S D 15, S D 25の2条の東西溝と、S K 11より出土した磁州窯系陶器の検出が上げられる。これまでの条坊遺構の調査成果などから判断して、S D 25は四条大路北側溝に、S D 15を北側の築地内溝と考えることができる。とくにS D 15上面に成立するS K 13の出土土器群が12世紀前半に、S D 15第3層出土土器群が11世紀後半にそれぞれ比定できることから、S D 15の廃絶期を12世紀前半までに措定できる。またS K 13, S D 25上層出土土器群の型式差がほとんどないことから、S D 15, S D 25いずれの溝も平安時代後期には溝としての機能を停止したものと考えられる。S K 11出土土器群も、S K 13, S D 25上層出土土器群ときわめて近い形態的特徴を備えており、同様の時期のものとして比定できる。S K 11から出土した磁州窯系陶器は、平安京内では稀な出土品で、平安時代における輸入陶磁器の流通を考える上で新たな資料を提供することとなり今後の資料の増加に注目したい。

III 右京七条一坊

1. 調査経過

調査の対象地は、平安京右京七条一坊八町にあたり、所在地は下京区朱雀分木町47番地である。今回（株）相互が倉庫の新築工事を計画し、京都市埋蔵文化財センターと協議した結果、遺跡の有無を確認するために、まず試掘調査を実施することになった。

試掘トレンチは、対象地内に3ヶ所設定して調査を実施した。その結果、敷地西側の歩道近くで平安時代の遺物を包含する南北方向の溝が検出された。この溝は平安京条坊制の皇嘉門大路東側溝にあたりと考えられたため、本格的な調査の必要ありと判断された。そこで再び相互倉庫と京都市埋蔵文化財センターが協議し、(財)京都市埋蔵文化財研究所に調査を委託した。

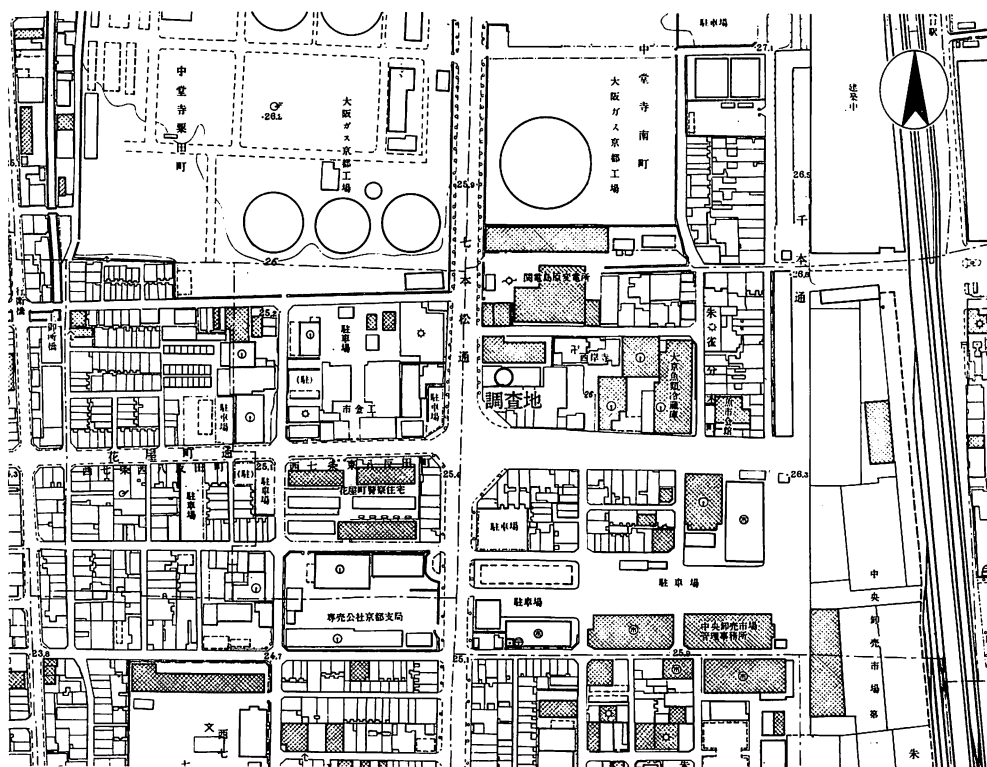


図12 調査位置図 (1/5000)

発掘調査対象地は487m²で、残土処理を考慮して当初東西28m、南北5mのトレンチを敷地の北寄りに設定した。調査は昭和58年5月10日より開始し、機械力で旧耕土を約30cm排除し、その後に遺構検出を始めた。その結果、試掘調査で検出した大路東側溝を長さ8mにわたり確認でき、また溝と同時期の建物跡も検出できた。建物跡はすべてトレンチ外に広がっていたため、適時トレンチを拡張し、その規模の確認に努めた。検出した遺構、遺物は図面、写真等の記録を行い、同月24日に調査を終了した。

2. 遺 構

層序 遺構の検出されるのは、地表下30cm前後と比較的浅く、検出面は東から西に向けてわずかに傾斜している。その上の堆積土は、まず近世以降の耕土および炭ガラを含む層が約20cmあり、その下に中世の遺物包含する灰褐色泥砂層がある。遺構の基盤層は、黄褐色砂泥層で、その下は黒褐色泥土層、砂礫層の順に堆積し、両層から遺物は検出されていない。

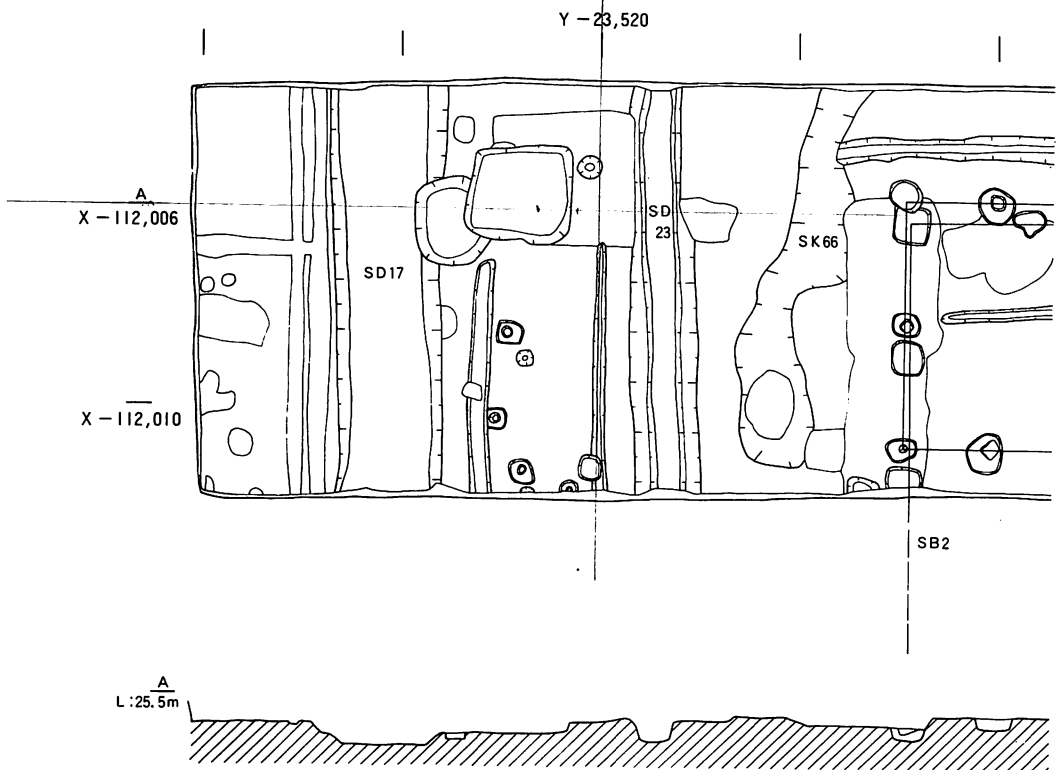


図 13 遺構実測図

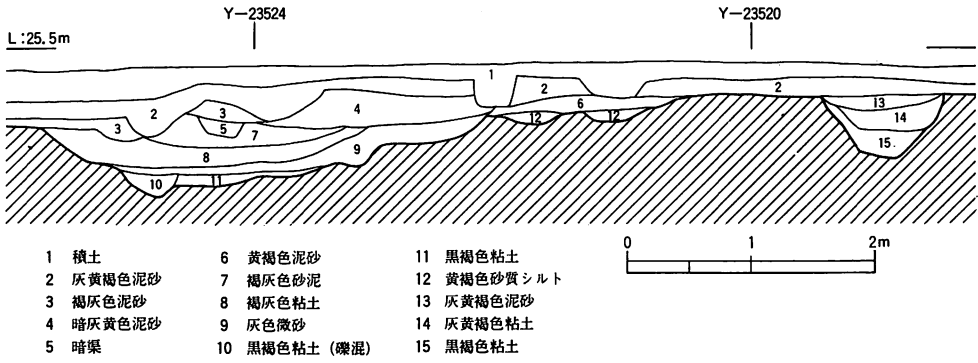
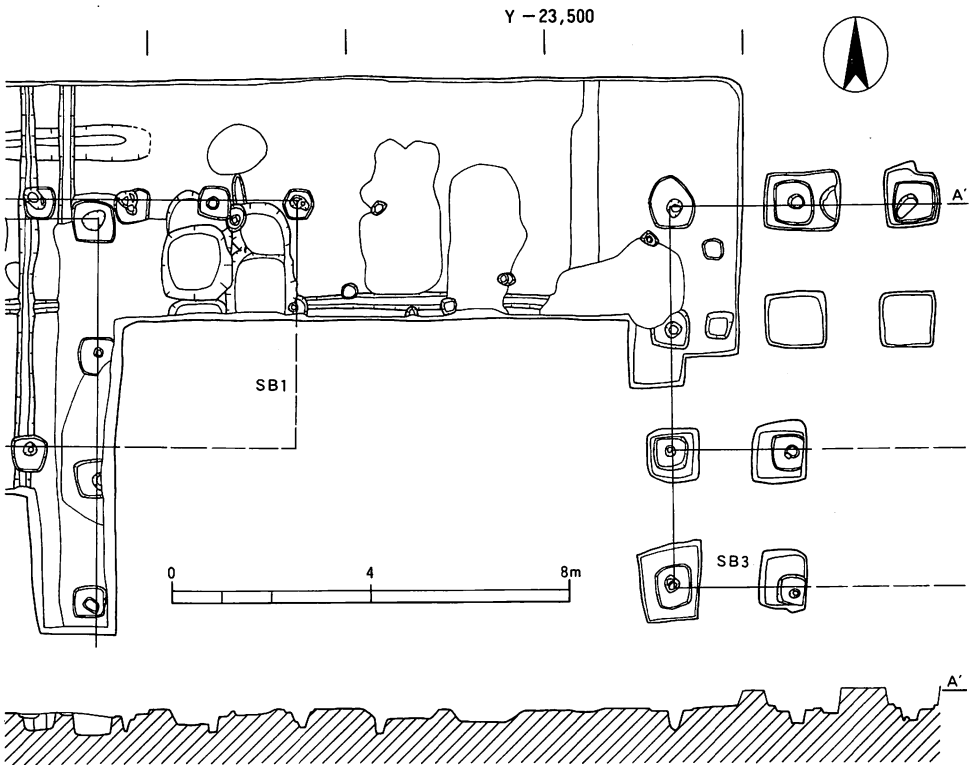


図 14 SD 17・23 断面実測図



遺構 検出された遺構は主に平安時代のもので、溝、掘立柱建物がある。溝 S D17は皇嘉門大路の東側溝と想定でき、S D23はその東にある築地の内側の溝であろう。掘立柱建物は3棟検出している。他には中世以降の田畑耕作に関係する細い溝と、それと同時代の土取りによる攪乱拡がある。今回は主要な平安時代の遺構について記述する。

溝 S D17 調査区の西端で検出した南北方向の溝で検出総長は8mである。埋土は上から褐灰色砂泥層・褐灰色粘土層・灰色微砂層・黒褐色粘土層である。上層の褐灰色砂泥層・褐灰色粘土層は堆積状況から、溝廃絶直前の堆積と考えられ、この溝は2時期に細分されるが、出土遺物の時期差は認められない。溝上幅は3.5m、深さ0.5~0.6mであり、底面は平坦面をなす。出土遺物は土師器、須恵器、瓦などがある。瓦が集中して出土したのは、溝の東半部で、溝底より10cm位上の位置である。

溝 S D23 溝 S D17の東5.6m（溝心々）で検出された南北溝で、溝 S D17と平行する。溝幅は1.0~1.2m、深さ0.5mで、断面の形状は両肩口から約20cm下で浅い段を有し、それより下部はU字状を呈する。埋土は3層で、下から黒褐色粘土層・灰黄褐色粘土層・灰黄褐色泥砂層の順に堆積する。灰黄褐色粘土層からは、溝 S D17と同様に多量の瓦が出土している。

土拡 S X66 溝 S D23と建物 S B 1の間で検出された不整形な落ち込みである。深さは0.1m程度で、埋土の黄灰色泥砂層からは土師器片がかなり出土している。

建物 S B 1 調査区の中央で検出した掘立柱建物で、溝 S D23から東へ4.8m離れて位置する。東西5間、南北2間の規模である。柱間寸法は、東西が1.8mの等間で、南北は北より2.65m、2.40mである。方位は北で東に1°振れている。柱穴は一辺が0.7m、深さ0.5mの隅丸方形であるが、円形にちかい柱穴もある。北側列で3例の抜き取り痕があり、その方向は北西である。

建物 S B 2 調査区の中央で検出した掘立柱建物で、建物 S B 1とは北西隅を同一地点として重複関係にあり、建物 S B 2が古い。東西2間、南北3間以上の南北棟で、東面に廂をもつ可能性がある。柱間寸法は南北が2.6mの等間で、東西が2.4mである。方位は北で東に1°振れている。柱穴は一辺が約0.8m、深さ約0.4mで、底部には意図的に置かれたと思える5~10cmの河原石が多く検出された。埋土は淡褐色泥砂である。

建物 S B 3 調査区の東端で検出した掘立柱建物で、この建物の北側柱穴列は建物 S B 1の北側柱穴列と一線上にある。南北3間、東西2間以上の東西棟で南面に廂をもつ。身舎の柱間寸法は東西、南北ともに2.4m、廂の出が3.0mである。方位は北で東に1°振れて

いる。廂の柱穴は相対的に浅い。北側柱穴列の西から2つ目の柱穴と西側柱穴列の北から2つ目の柱穴で厚さ2cm程度の礎板を検出している。

3. 遺物

今回の調査で出土した遺物は土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦などであり、整理箱に24箱出土している。これらの遺物は、S D17・23から出土

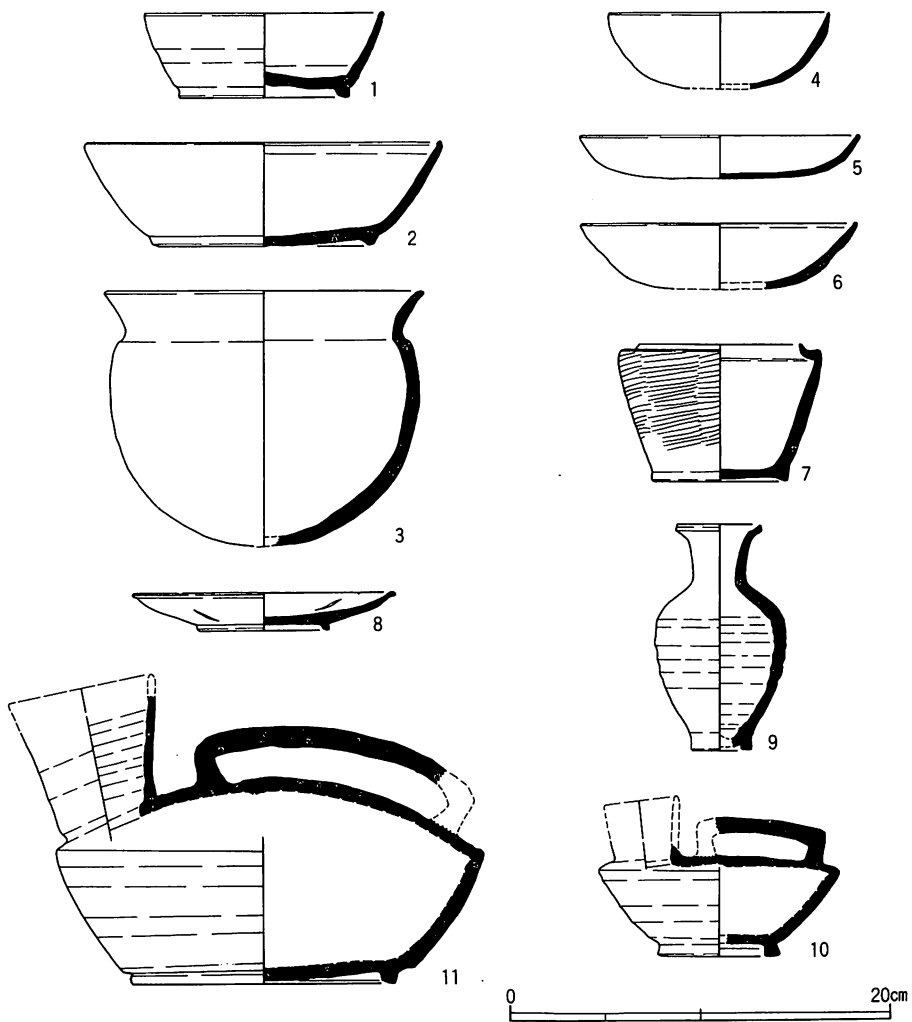


図 15 遺物実測図

した丸瓦・平瓦が大多数を占め、土器類はS K66から土師器がまとまって出土した他、非常に少ない。これらの遺物の年代は、大半が平安時代前期に比定されるものである。

S K66出土遺物（図15 1～7）

土師器・須恵器・黒色土器・瓦などが出土している。土師器の割合が非常に高く、須恵器・黒色土器・瓦は少量であり、小破片のことが多い。土師器には椀・皿・杯・高坏・壺・甕の器形であるが、大多数を占めるのは椀・皿・坏の器形である。これらの土師器は磨滅が著しく、調整手法などを観察できる個体は少ない。

S D23出土遺物（図15 8）

少量の土師器・須恵器・緑釉陶器と多量の瓦が出土している。多数を占める瓦はすべて丸瓦・平瓦片で軒瓦は無い。土師器・須恵器は小破片で凶化・観察できるものは無いが、緑釉陶器の輪花皿が完形で1点出土している。

S D17出土遺物（図15 9～11）

土師器・須恵器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦が出土している。S D23同様遺物の大多数は平瓦・丸瓦片であり、土器類は極めて少ない。その中で須恵器瓶子、平瓶2個体が完形で出土している。これらの出土遺物はすべての下層よりの出土であり、築地側に片寄った溝の東側に集中している。

4. ま と め

今回の調査では、平安時代前期の大路側溝、犬走・築地に相当する部分、建物跡などの一連の遺構が検出された。これまでの平安京における調査成果から推定する測量データでは、皇嘉門大路東側築地中心線は当該地においてY-23,520.55付近に想定され、今回の調査結果は、平安京の条坊復元に有効な資料となる。また、建物跡とあわせて、平安京造営時における一町内の宅地割、宅地内における建物配置などを復元するうえで貴重な調査成果といえる。

皇嘉門大路東側溝S D17および築地宅地側の溝S D23からは多量の瓦が出土しており、瓦葺の築地塀の存在も想定できるが、出土瓦など今後の検討課題といえる。

IV 右京七条二坊

1. 調査経過

調査は公社賃貸亀井マンション新築工事に伴うもので、調査地は下京区西七条石ヶ坪町40番地に所在する約660m²の宅地である。当該地は平安京右京七条二坊西堀川小路に推定されており、昭和57年12月の試掘調査で西堀川跡と考えられる遺構を検出した。このため昭和58年4月20日から5月19日にかけて発掘調査を実施した。調査区は西堀川小路の全体を確認するため、東西30m、南北8mに設定した。調査面積は拡張した地区を含めて約250m²であった。

調査の結果、平安時代前期の溝、土壇、柱穴、平安時代後期から室町時代にかけての流路跡、江戸時代末の西高瀬川流路跡などを検出した。特に、平安時代前期の溝、柱穴は、西堀川小路東溝と築地と考えられるものである。

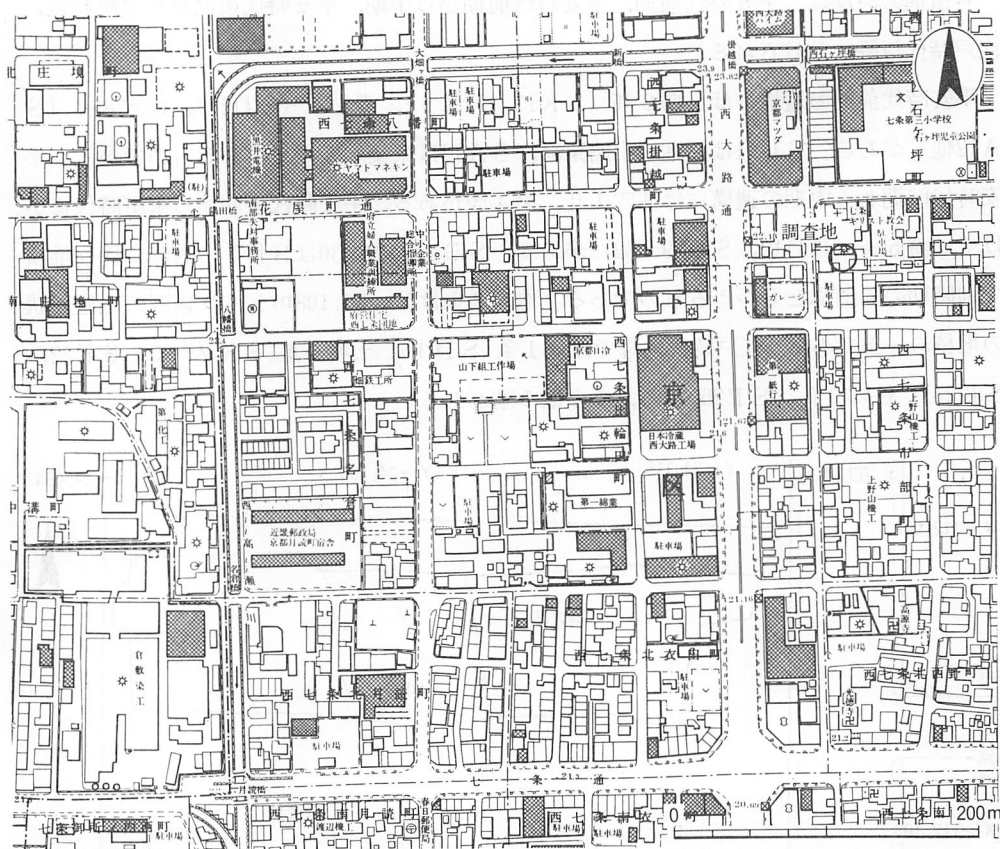


図16 調査位置図 (1/5000)

2. 遺 構

調査地に堆積する土層は大きく5層に分けることができる。第1層は近代以降の盛土で厚さ約30cmを測る。第2層は厚さ約20cmの灰褐色砂泥層から成る。これは江戸時代以降の旧耕作土である。第3層は黄灰色砂及び砂礫層から成り、厚さ約1.2m前後を測る。主としてY-24,094mライン以西に堆積し、古墳時代から室町時代に至る遺物を包含する。河川の流路や氾濫原と考えられる堆積を示す。第4層は逆にY-24,094mライン以東に堆積する厚さ約20cmの黒褐色泥砂層で、平安時代前期から中期の遺物を包含する。西堀川東溝や築地などの平安時代前期の遺構群は、この土層の排土後に検出される。土器、瓦、木片、炭、礫などが雑然と含まれ、洪水に伴った堆積の可能性が高い。第5層は平安時代前期の遺構群の成立する褐色砂礫及び粗砂層で、遺物は出土していない。

検出した遺構は32基で、内訳は溝7条、土壌12基、柱穴12孔、その他1基であった。

各遺構の時期は、平安時代前期、平安時代前期から中期、平安時代後期から室町時代、江戸時代以降に分けられる。

平安時代前期の遺構には土壌2基(SK13, SK9)、溝1条(SD11)、柱穴8孔(SA12他)がある。SD11は西堀川小路東溝、SA12は東築地と考えられるものである。平安時代前期から中期の遺構には柱穴1孔、第4層がある。平安時代後期から室町時代にかけては溝5条(SD19, SD29~32)がある。SD19・29・30はSD1の改修に伴う堆積で別時期の同遺構ともいえるものである。他の2条はY-24,108mライン以西の氾濫原状の堆積の一部である。江戸時代以降では溝1条(SD1)、土壌6基(SK2~5, SK22, SK24)、柱穴3孔(SP25~27)、その他1基がある。

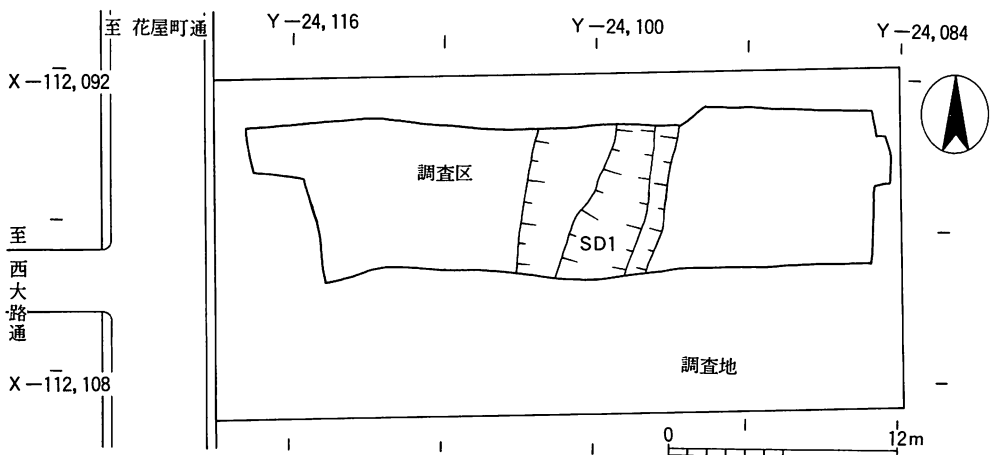


図17 調査区平板図 (1/400)

以下主要な遺構について概述する。

SD11 調査区東辺に検出した南北溝で、Y-24,090mラインを中心に幅1.2m、深さ10cmを測る。極めて浅く、上層のかなりの部分が流失したと考えられ、褐灰色砂泥、黒褐色シルト層の堆積が見られる。平安時代前期の遺物が出土しており、西堀川小路東溝の推定位置によく適合する。

柱穴群 SP14~18, SA12などで、SD11の東側に検出される。直径40~50cm、深さ30cm前後を測る。柱あたりの明瞭なものと不明瞭なものがある。柱あたりはいずれも20~25cmを測る。SA12は西堀川小路東築地の可能性が高い柱穴列である。各柱穴から出土した遺物は平安時代前期のものである。

SK7 調査区東南辺に検出した東南方向に落ち込む土壌である。幅4m以上、深さ40cmを測る。上から褐灰色泥砂、灰黄褐色泥土、灰黄褐色細砂、褐灰色泥土層の順に堆積する。出土遺物は平安時代前期のものである。

SK9 南北4m、東西3m以上の円形を呈し、深さは20cmを測る。黒褐色泥砂層の堆積が見られ、平安時代前期の遺物が出土した。

3. 遺物

出土遺物の総量は整理箱に12箱を数えた。その内訳は、土器類の他に瓦類、木製品、土製品、石製品、金属製品などである。

土器類には土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、須恵質陶器、輸入陶磁器、陶器、施釉陶器、国産磁器、製塩土器などの器種がある。時期別には古墳時代から江戸時代以降の各時代にわたっている。

平安時代前期の土器はSD11、各柱穴、SK7、SK9などから出土している。平安時代中期の土器は、第4層などからの出土例があるが、前代からの混入土器が多

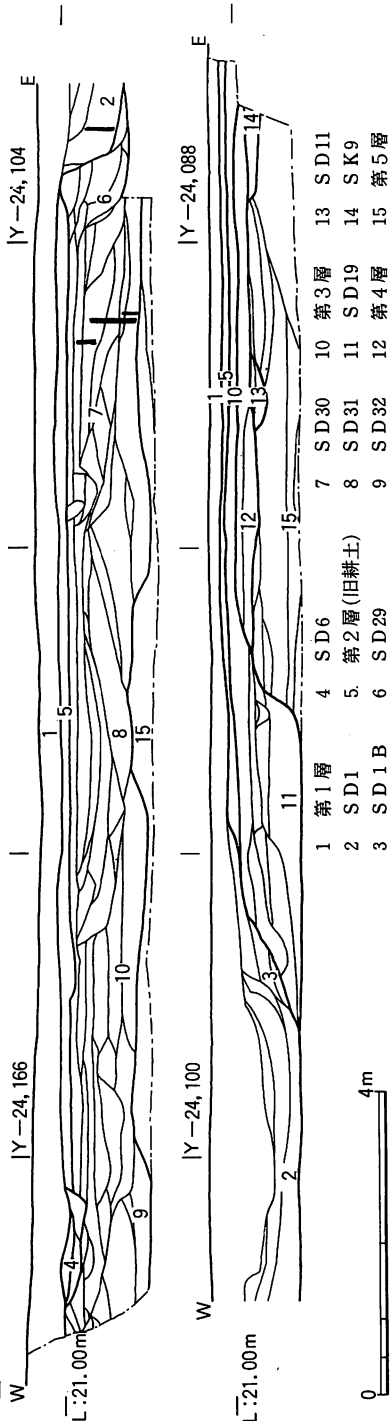


図18 北壁断面図

く中期自体の土器は極めて微量である。平安時代後期から室町時代にかけての土器は、主としてY-24,094mライン以西の第3層から出土したもので、これも前代の土器の混入が多い。江戸時代以降の土器は、旧耕作土、SD1などから出土した。

その他では、土製品のうち土馬の出土が8例を数えており特筆に値しよう。^{註1}

本報告で図示した土器(図20)は各遺構から出土した平安時代前期に属するものである。

土師器杯(1)は外面をヘラケズリ、口縁部内外面をナデ調整する。器壁はやや厚い。甕(2)は口径26.8cmを測り、口頸部内外面に粗いハケメ調整を施す。体部以下は欠損している。釜(3)は胎土に粗い砂粒を含む。外面に厚い煤、内面に炭化物が付着する。口径24.8cmを測る。

黒色土器甕(4)は口径17.5cmを測り、内面にやや幅広のヘラミガキを施す。口縁部外面はナデ調整、体部外面は煤が付着して調整は不明瞭である。

緑釉陶器皿(5)は見込み部分をヘラミガキ調整、口縁部と内面をロクロナデによる調

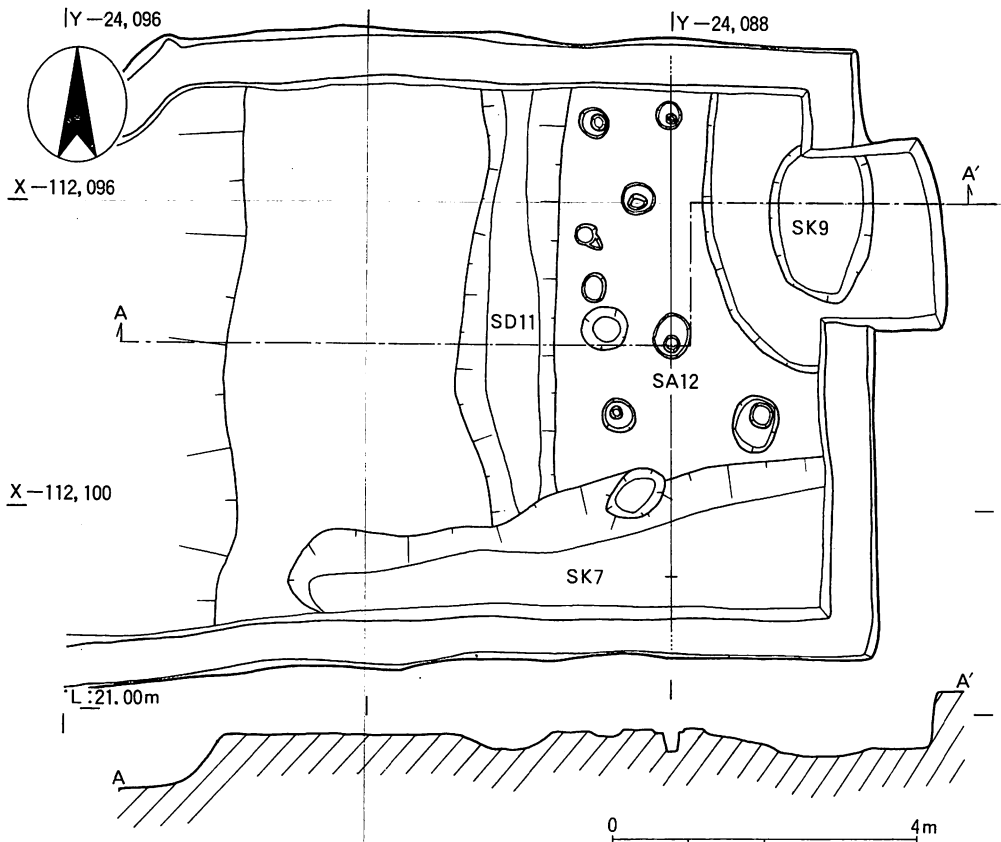


図19 調査区東側遺構実測図

292

9

288

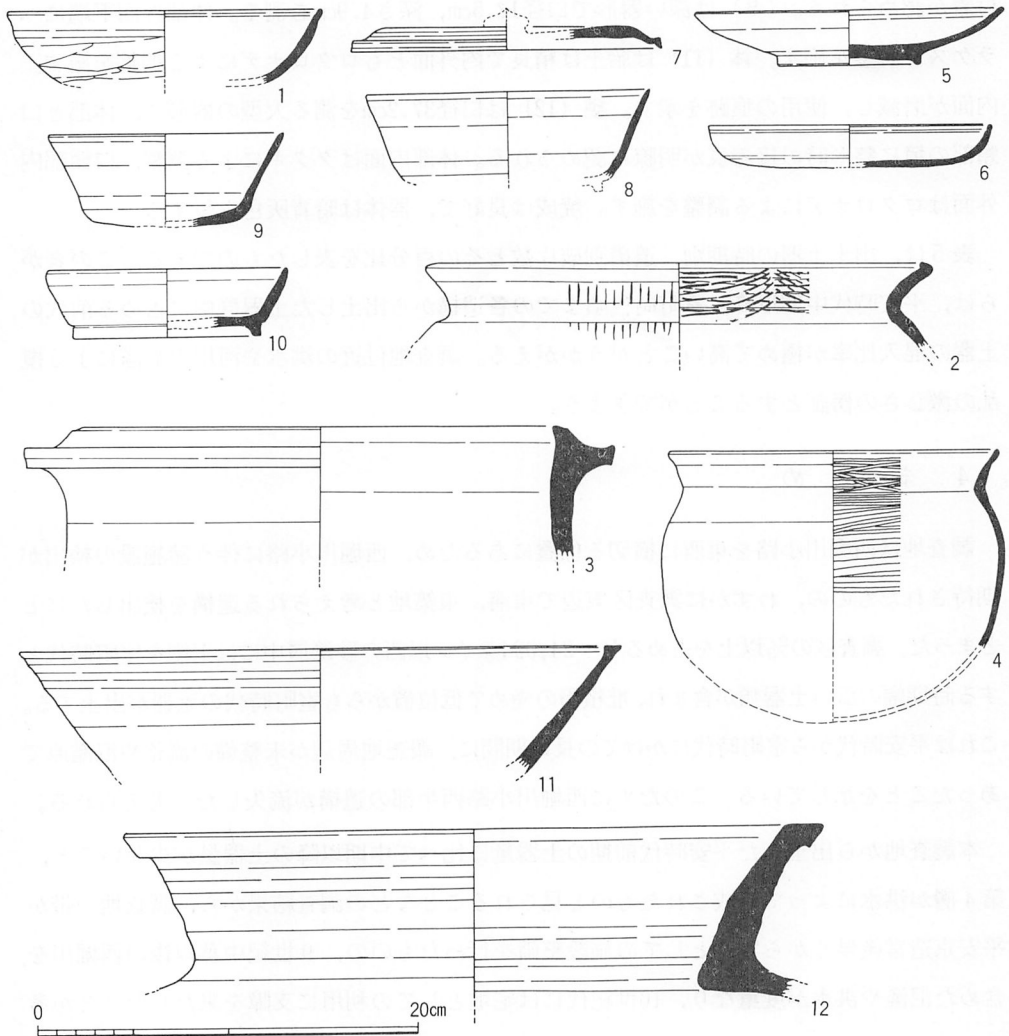


図20 遺物実測図

整を施す。体部外面をヘラケズリ調整し、高台を削り出す。釉はハケ塗りで器体全面にかけ、淡黄緑色の釉色を呈する。

灰釉陶器皿（6）に内外面ともにロクロナデ調整を施す。口縁部内面に一条の沈線を入れる。釉はほぼ透明で内面及び口縁部内外面にかかる。

須恵器蓋（7）は口縁部及び内面をロクロナデ調整，上面をヘラケズリ調整する。つまみ部分は欠損するが，宝珠形つまみがつくと考えられる。杯は高台を持つもの（8・10）と高台がなくやや深い器形のもの（9）がある。（8）は口径15cm，器高5.0cm前後を測り，やや深い器形である。（10）は小口径で皿に近い器形で，高台を貼り付け，底部外面に墨の

付着が認められる。(9)は深い器形で口径12.5cm、深さ4.9cmを測る。体部外面下端にヘラケズリ調整を施す。鉢(11)は胎土は精良で内外面ともロクロナデによる調整を施す。内面が磨減し、使用の痕跡を示す。甕(12)は口径37.2cmを測る大型の器形で、体部と口頸部の境に整形時の接着痕が明瞭に認められる。体部内面はタタキによる調整、口頸部内外面はロクロナデによる調整を施す。焼成は良好で、器体は暗青灰色を呈する。

表5は、出土土器の時期別、遺構別破片数とその百分比を表したものである。この表からは、平安時代中期以降、室町時代頃までの各遺構から出土した土器群中に占める前代の土器の混入比率が極めて高いことがうかがえる。調査地付近の洪水や河川の氾濫による攪乱の激しさの傍証とすることができよう。

4. ま と め

調査地は西堀川小路を東西に横切る位置にあるため、西堀川小路に伴う諸施設^{註2}の検出が期待されたものの、わずかに調査区東辺で東溝、東築地と考えられる遺構を検出したにとどまった。調査区の%以上を占めるY-24,094ライン以西の砂礫層中には下限を室町時代とする時期幅の広い土器類が含まれ、堆積層の極めて低位置からも室町時代の土器が出土する。これは平安時代から室町時代にかけての長い期間に、調査地周辺が未整備の流路や氾濫原であったことを示している。このために西堀川小路西半部の遺構が流失したと考えられる。

本調査地から出土した平安時代前期の土器量に比べて中期以降の土器量が少ないこと、第4層が洪水によって形成されたものと見られることなどの調査結果から、調査地一帯が平安京造営後早くから宅地としての施設整備を行ったものの、9世紀中葉以後の西堀川を含めた氾濫や洪水が度重なり、10世紀代には宅地としての利用に支障を来たことが考えられよう。これは、平安時代初期の文献の9世紀中葉から後葉にかけて河川の氾濫や洪水が多発した記録^{註3}からも裏付けられる。

調査地周辺の耕作地化が計られたのは、江戸時代以後の河道の整備や護岸工事の結果であるが、Y-094以東は第3層の堆積が薄く、平安時代の遺構がよく残ることから、氾濫の影響が少なく耕作地化はやや早い時期であった可能性はある。

SD1は江戸時代以来農業用水路となっていた西堀川の流路を利用し改修した西高瀬川の流路跡である^{註4}。西高瀬川は文久3年(1863)に開削され、数次の付替・改修を経て、昭和4年以後の大規模な付替工事による西方の現西高瀬川の完成に至って埋没し、水路としての機能を最終的に失ったと考えられる。

註

1. SK4・9・10・11などから出土した。
2. 西堀川の調査は、右京五条二坊（『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度）、右京三条二坊（昭和57年度 未報告）の他に右京四条二坊～八条二坊（『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和56年度）の大阪ガスに伴う調査がある。
3. 日本後紀・日本紀略・類聚国史・続日本後紀・文徳実録・三代実録・扶桑略記など。
4. 藤田叔民「都市改造の構想」『京都の歴史7』京都市史編さん所 昭和55年。

表1 左京三条一坊出土土器表

土器番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	出土遺構	図版番号	図番号
1	土師器	椀	14.2	2.7	SD1		3
2	〃	〃	13.8	3.2	〃	6	〃
3	〃	〃	13.4	2.7	〃		〃
4	〃	〃	13.8	3.2	〃	〃	〃
5	〃	〃	13.8	3.9	〃		〃
6	〃	皿	16.0	2.2	〃	〃	〃
7	〃	〃	15.5	2.3	〃	〃	〃
8	〃	〃	17.0	2.0	〃		〃
9	〃	〃	16.8	2.2	〃	〃	〃
10	〃	〃	18.6	2.0	〃	〃	〃
11	〃	杯	15.8	(3.7)	〃		〃
12	〃	〃	16.2	3.6	〃	〃	〃
13	〃	〃	18.0	3.9	〃	〃	〃
14	〃	〃	21.0	(4.7)	〃		〃
15	〃	脚台	21.6	(4.4)	〃		〃
16	須恵器	皿	15.2	2.9	〃	〃	〃
17	〃	杯	19.5	7.2	〃	〃	〃

表2 左京四条一坊出土土器表

土器番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	出土遺構	図版番号	図番号
1	土師器	皿	10.0	1.4	S D15	7	10
2	"	"	10.1	1.4	"	"	"
3	"	"	14.5	3.1	"	"	"
4	"	"	15.3	2.7	"	"	"
5	"	"	15.0	2.7	"	"	"
6	"	"	9.8	1.7	"	"	"
7	"	"	10.6	1.8	"	"	"
8	"	"	10.4	1.7	"	"	"
9	"	"	10.6	1.8	"	"	"
10	"	"	10.6	1.8	"	"	"
11	"	"	10.5	1.8	"	"	"
12	"	"	10.3	1.4	"	"	"
13	"	"	14.8	3.6	"	"	"
14	"	"	15.6	2.5	"	"	"
15	"	"	15.3	2.8	"	"	"
16	"	"	14.8	2.8	"	"	"
17	"	"	14.8	3.0	"	"	"
18	"	"	14.5	2.8	"	"	"
19	"	"	8.8	1.7	S K13	"	"
20	"	"	9.0	1.8	"	"	"
21	"	"	9.0	1.9	"	"	"
22	"	"	13.9	2.5	"	"	"
23	"	"	13.8	2.7	"	"	"
24	"	"	(14.3)	2.5	"	"	"
25	瓦器	椀	15.1		"	"	"
26	土師器	皿	9.6	(1.6)	S X11	"	"
27	"	"	9.8	(1.6)	"	"	"
28	"	"	12.8	(2.6)	"	"	"
29	"	"	13.2	(3.1)	"	"	"
30	"	"	9.2	(1.5)	S D25	"	"
31	"	"	9.2	1.5	"	"	"
32	"	"	9.0	1.9	"	"	"
33	"	"	9.0	(1.5)	"	"	"
34	"	"	13.6	(2.5)	"	"	"
35	"	"	14.3	(2.7)	"	"	"
36	"	椀	12.4	3.8	S E12	"	"
37	須恵器	蓋	20.2		"	"	"
38	輸入陶器	壺			S K11	"	"

表3 右京七条一坊出土土器表

土器番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	出土遺構	図版番号	図番号
1	須惠器	杯	12.5	4.5	S K 66	8	15
2	土師器	杯	18.7	5.5	"	"	"
3	"	甕	17.0	13.5	"	"	"
4	"	椀	11.8		"	"	"
5	"	皿	15.0	2.3	"	"	"
6	"	椀	15.7	3.6	"	"	"
7	"	壺	8.5	7.3	"	"	"
8	緑釉陶器	皿	13.8	1.9	S D 23	"	"
9	須惠器	瓶子	4.4	11.9	S D 17	"	"
10	"	平瓶			"		"
11	"	"	7.8	15.8	"	"	"

表4 右京七条二坊出土土器表

土器番号	器種	器形	口径	器高	出土遺構	図版番号	図番号
1	土師器	杯	16.7	4.0	S K 9		20
2	"	甕	26.8		第4層		"
3	"	釜	31.2		第4層		"
4	黒色土器	甕	17.5		S P 18		"
5	緑釉陶器	皿	16.5	2.9	第3層		"
6	灰釉陶器	皿	15.1	2.3	"		"
7	須惠器	蓋	15.4		S K 9		"
8	"	杯	15.0		"		"
9	"	"	12.5	4.9	"		"
10	"	"	12.8	3.6	第3層		"
11	"	鉢	32.0		S K 7		"
12	"	甕	37.2		S D 19		"

表5 右京七条二坊出土土器破片数表

時代	遺構	土師器	須恵器	灰釉陶器	緑釉陶器	黒色土器	瓦	器	輸入陶磁器	須恵質陶器	陶	器	施釉陶器	国産磁器	その他	合計	%
平安時代前期	SK7	365	57	2	4	4	4								1		
	SK9	287	51	1	3	5											
	SD11	22	14														
	SP13	8															
	SP17	4															
	SP18	8			1	4											
	SP20	1	1			6											
	SP28	11															
平安時代前期-中期	SP16	3															
	第4層	92	86	3	2	4									1	196	6.33
平安時代後期 ↓ 室町時代	SD8	11	10	1	1												
	SD19	126	131	9	8	12						2	4				
	SD29	11	25	2	2		1		2			3					
	SD30	10	2			2											
	SD31	9	11			2											
	SD32	11	4		1	2											
	第3層	455	252	7	25	22	1	1					3	11		1	1193
江戸時代以降	SD1	6	12														
	SD1B	12	40	6	2							1	4				
	SK3	13	6						1			1	1				
	SK4	14	2			2											
	SD6	1										1					
	SK23	1	3									1	6				
	第3層	30	13	2			1			2		5	31		3		
その他	275	230	9	19	22	1	2				9	9	7	2	585	18.91	
合計	1,791	950	42	67	86	4	6	26	68	44	8	3094					
%	57.89	30.70	1.36	2.17	2.78	0.13	0.19	0.84	2.20	1.42	0.26	100.00					

圖 版



1 遺跡全景 (南から)



2 SD1 (南西から)



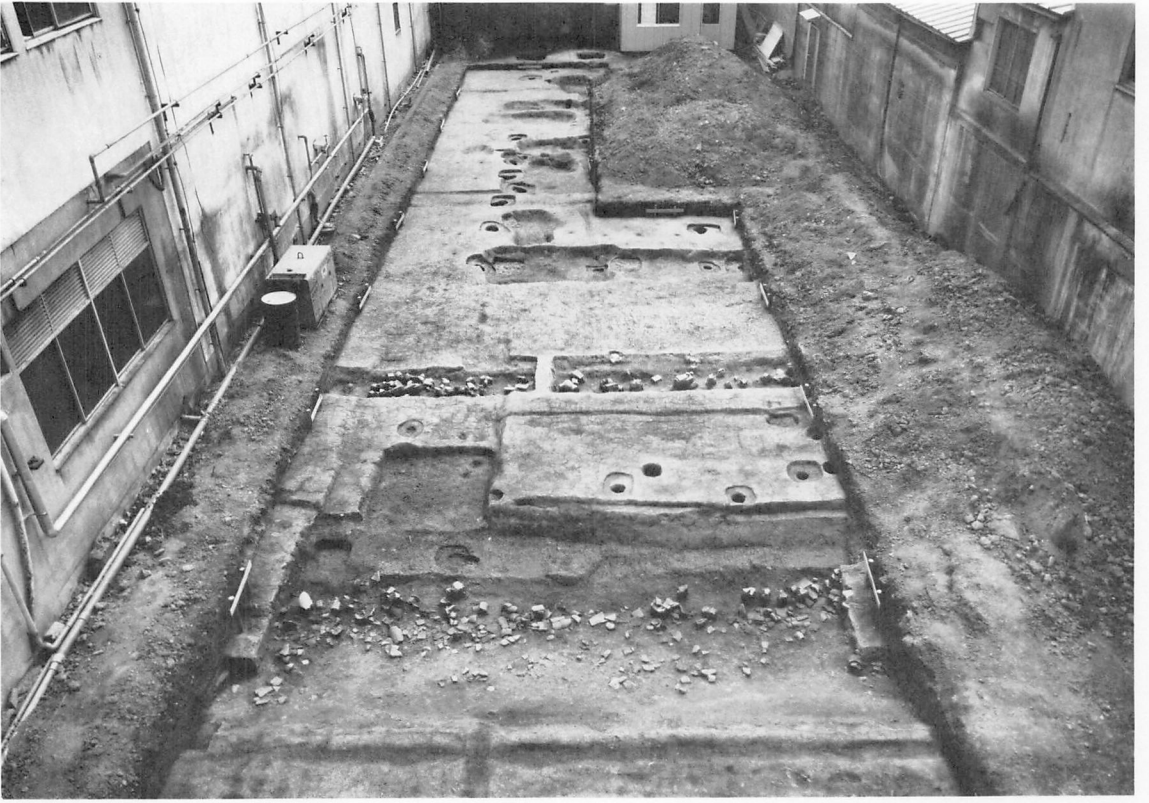
1 遺跡全景 (北から)



2 S D15 (西から)



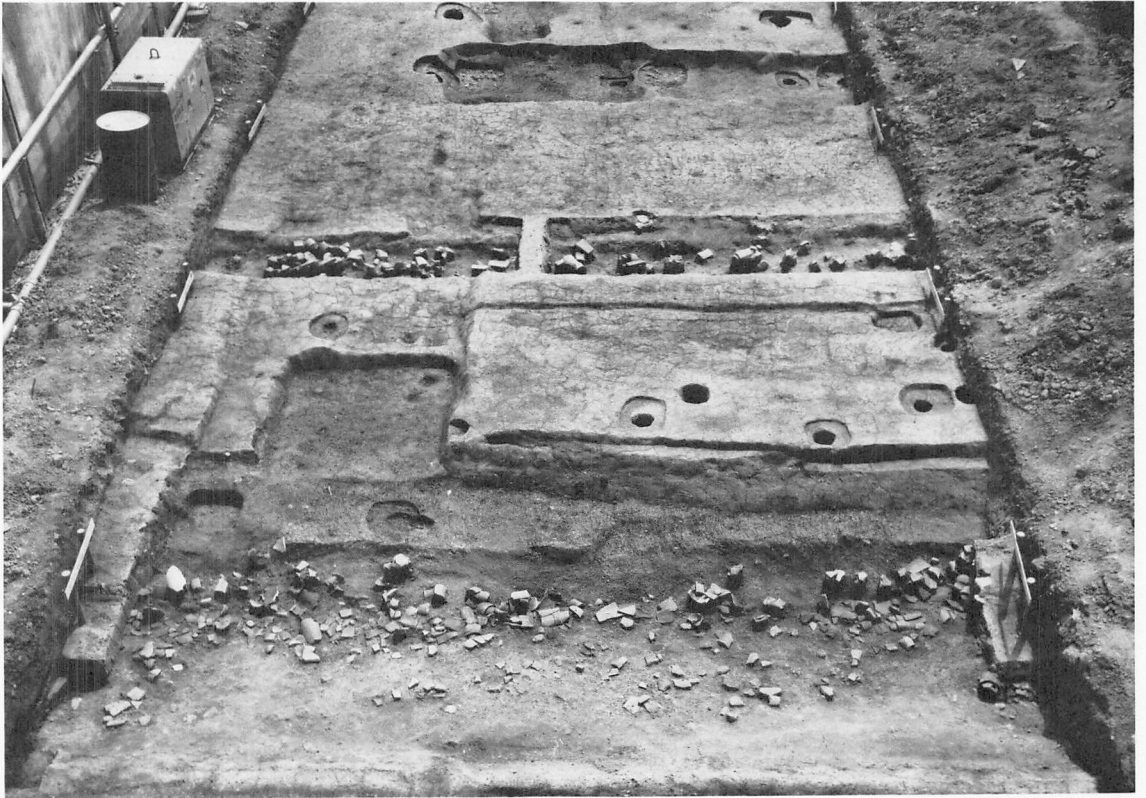
3 S E12 (北から)



1 遺跡全景（西から）



2 掘立柱建物（西から）



1 S D17・23 (西から)



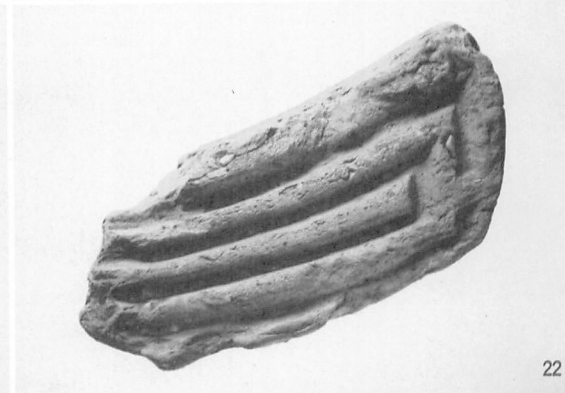
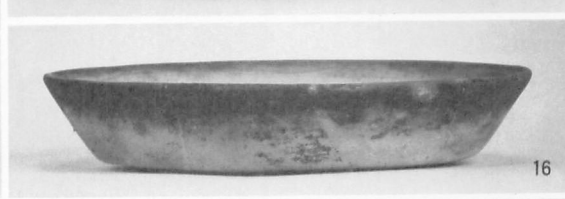
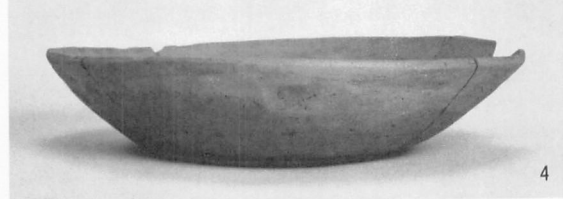
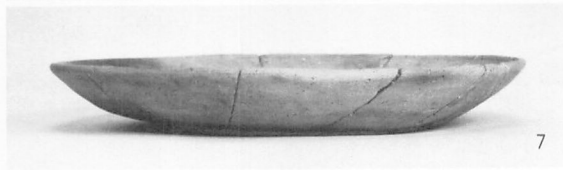
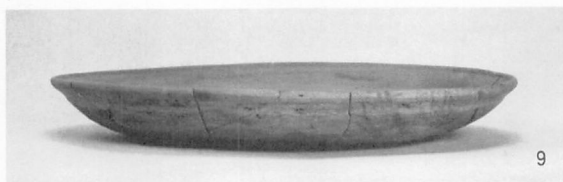
2 S D17瓦出土状況 (北西から)



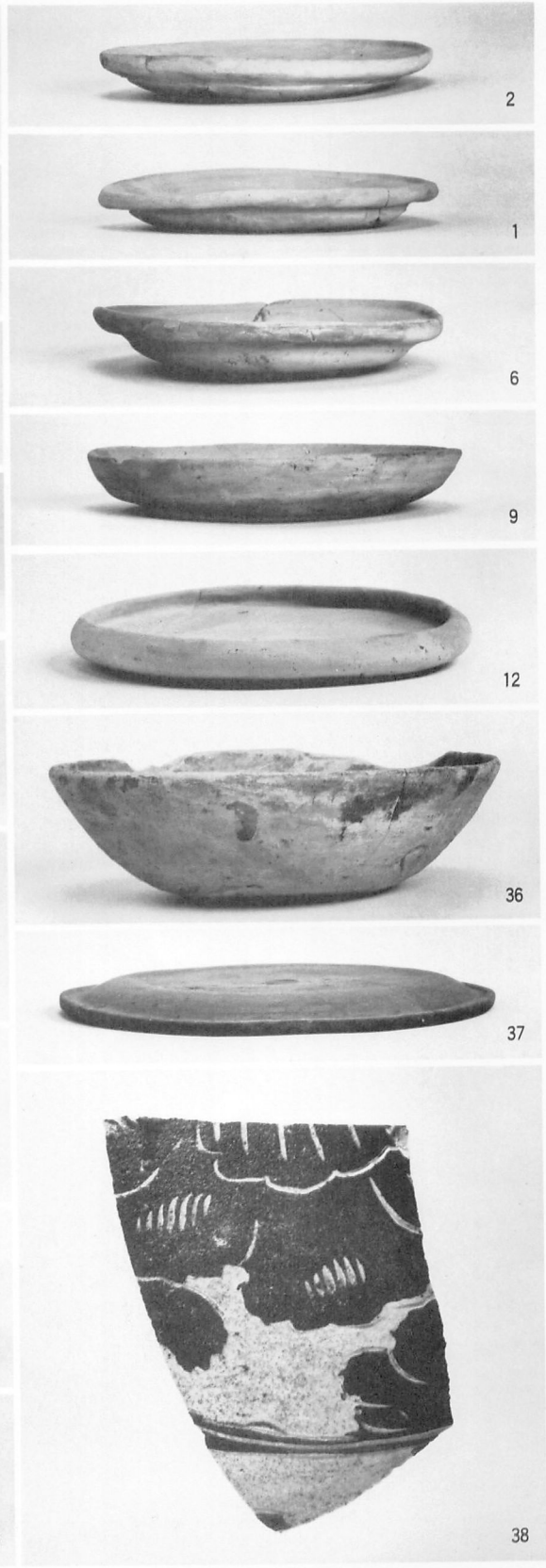
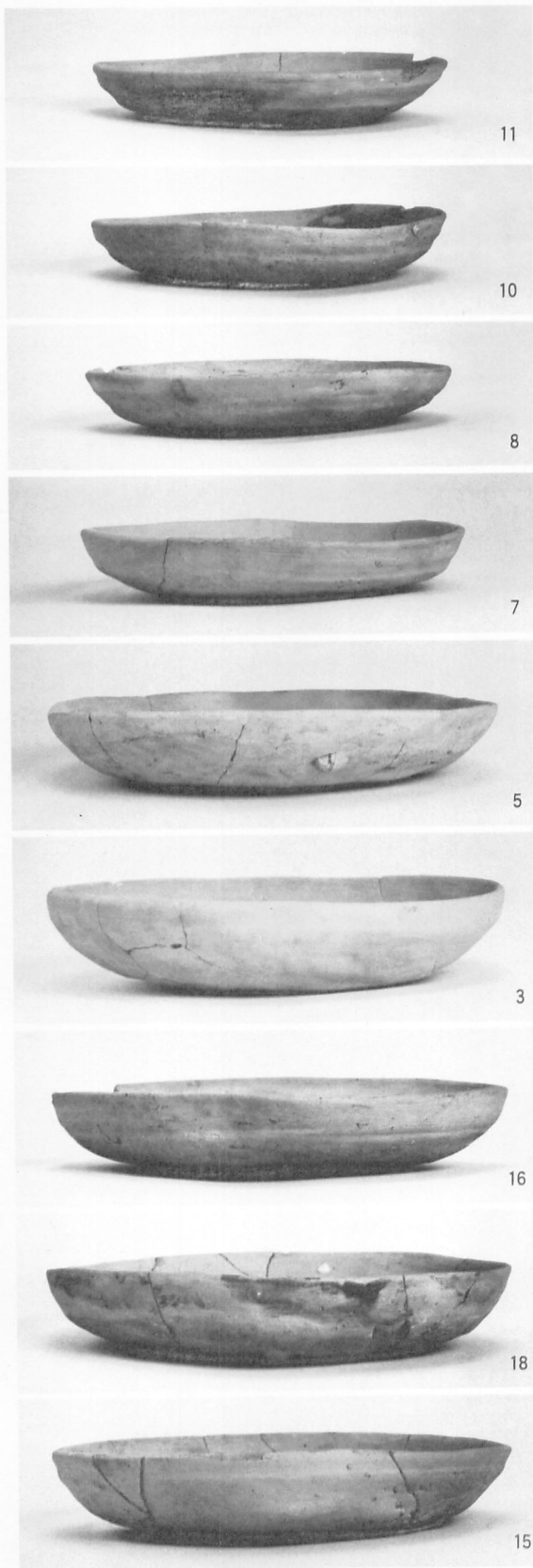
1 遺跡全景 (西から)



2 SD1断面 (西南から)



土師器、須恵器、瓦



土師器、須恵器、磁州窯陶器



5



6



4



7



3



1



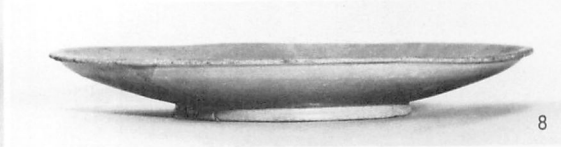
2



9



11



8

土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器

平安京跡発掘調査概報

昭和58年度

発行日 昭和59年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社